繋ぐ絆と境界破壊

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
繋ぐ絆と境界破壊

【Ｎコード】
Ｎ３１１９Ｕ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
まあが書いたバカとテストと召喚獣の他の小説家さんとのコラボ短編小説です。

前書

これはまあが今までに他のバカとテストと召喚獣二次創作を書いている小説家さんにオリジナルキャラを借りて書かせていただいた作品をまとめさせていただいたものです。

随時、まとめていきますので楽しんでいただけたら幸いです。

作者、出演キャラ

『サドと邪悪な召喚獣』、『サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～サドとちっちゃな幼なじみ～』より、前田理音、怜生兄弟

『嘘と話術とノラ猫』より、黒須伐

『僕と歪んだ愛情表現？』より、吉井深秋

『バカとテストと勤労少年』より、結城和真

現状で言えばこのメンバーが作者の出演キャラになります。

世界の境界が消えた事でどんな絆が繋がれるんでしょうか？

第1問（前書き）

最初の投稿は新作です。

『バカとテストと勤労少年』より、結城和真とＧＡＵさんの『バカと雲雀と召喚獣』より支倉ひばり。

ＧＡＵさんに怒られなければ良いなあ。

第1問

「……すいません。西村先生」

「支倉、お前が謝る必要はない」

『支倉ひばり』は生徒指導室で申し訳なさそうにクラス担任である『西村教諭』に頭を下げると西村教諭はため息を吐き、

「それで、壊れた空調設備を修理するのにクラスの予算から修理費用と修理の手配をお願いしたいんですけど、このままだと夏になるとみっちゃんとか体調を崩してしまいますので」

「……そうだな。吉井や坂本を中心としたバカどもはどうでもいいが、支倉や姫路、来島と言った女子生徒達は辛いだろう……が」

ひばりはクラスメート達がいつものようにバカ騒ぎをしてクラス設備を破壊した事で西村教諭に修理費用を出して欲しいと言うが西村教諭はひばりの意見には賛成だが歯切れは悪く眉間にしわを寄せるともう1度、深いため息を吐き、

「……残念ながら、クラスの予算は先日の吉井達が白金の腕輪を使って壁を壊した個所の修理で底をついた」

「……へ？　ほ、本当ですか！？　西村先生！！」

西村教諭はいつもバカな事をするFクラスの生徒が起こした問題でAクラスと引き分けた事で手に入れた予算を使いきったと言い、ひばりは最初、西村教諭の言葉の意味がわからなかったようで一瞬呆

けるが直ぐに驚きの声をあげる。

「あぁ、残念だが本当だ。修理費用はでない」

「……」

西村教諭は眉間にしわを寄せたまま首を振り言うとひばりはどうして良いかわからないようで言葉を失っているが、

「ど、どうにかなりませんか！？」

「……1人だけ、そう言うのを頼める生徒がいないわけでもないんだが」

ひばりは直ぐに正気に戻ると西村教諭にどうにかならないかと聞くと西村教諭は眉間にしわを寄せたまま、その生徒に何かあるのか言いだしにくそうに言葉を濁すと、

「そ、それって誰ですか？　あたし、直接、頼んできます」

「支倉、落ち着け……Cクラスの結城と言う男子生徒なんだが」

ひばりはその生徒を直接頼むと言い西村教諭に生徒の名前を教えて欲しいと言い、西村教諭は『高橋洋子教諭』の従弟であり、自分や洋子の手伝いを良くしてくれる『結城和真』と言う生徒の名前をあげ、

「それじゃあ、その人に」

「待て。支倉、お前が言うと問題が起きそうだ」

ひばりは和真に会いに行こうとするが西村教諭はひばりを止める。

「どうかしたんですか？」

「……結城はな。Ｆクラスの生徒達に嫌悪感を持っているんだ。支倉が頼もうと絶対にＦクラスの事では協力してくれん」

ひばりは西村教諭が自分を止める理由がわからないと首を傾げると西村教諭は和真がＦクラスに協力する事はないと言い、

「どうしてですか！？　Ｆクラスだからなんてひどいです。Ｆクラスだからって」

「……すまん。支倉、教師として担任としてお前達を庇護してやりたいんだが、結城に関して言えば、Ｆクラスの味方をする事はできん」

ひばりは和真がＦクラスだからと言う理由で自分達をバカにしていると非難するように言うが西村教諭は首を振ると、

「どうしてですか？　西村先生はＦクラスを……」

「……すまん。結城は支倉が思っている以上にＦクラスに吉井に迷惑をかけられているんだ」

西村教諭はひばりの幼なじみである『吉井明久』を中心としたＦクラスから実害を受けている生徒だと言う。

「アキくんが迷惑をかけてる？　どう言う事ですか？」

「……お前達が最初に起こした試召戦争で破壊したBランク設備の室外機、Bランク設備とDランク設備の教室の壁、清涼祭で破壊した教頭室、血だらけになったプールの掃除など、他にもFクラスが破壊した学園設備の修理。吉井がサボった事で残った観察処分者の仕事。それらが全部、結城のところに行っている。先生達も仕事が雑な吉井に任せるよりは結城に任せた方が良いと言いだす先生も多くてな。結城に頼む事が多くなってきている」

「……そ、そんな人がいるんですか？」

ひばりはFクラスがそんなに和真に憎まれるような事はしていないと言いたげだが、西村教諭は和真が今までにFクラスから受けている実害を話して行くと流石のひばりもどれだけFクラスが和真に迷惑をかけているか理解したようで顔を引きつらせるが、

「そ、それでも、どうにかしないといけないですから、あたし、結城くんにお願いしてきます。誠意を持って話せばきっと聞いてくれるはずです」

「支倉、ま、待て。結城に頼むには頼み方が……一先ず、高橋先生に結城を説得して貰うか」

それでも頼める人間が和真しかいないため、ひばりは生徒指導室を出て行き、西村教諭はため息を吐くと生徒指導室に取り付けられている内線電話の受話器を取り、和真の従姉である洋子に連絡を入れる。

「あ、あの。結城くんは」

「支倉さん？　結城君に何かよう？」

ひばりはCクラスの教室のドアを開けると遠慮がちに和真の名前を呼ぶとCクラス代表の『小山友香』がひばりを見つけて声をかけ、

「あ、あの。結城くんに用があって」

「支倉さんがカズに？　カズにまたも女の影？」

「……山下さん、おかしな事を言わない」

ひばりは友香に和真を呼んで欲しいと言うと『山下清美』が和真をいじろうとするが友香はため息を吐くと、

「支倉さん、残念ながら結城君ならあの状況よ。たぶん、帰りまで起きないわよ」

「今日も朝6時から、昨日の放課後にFクラスの坂本くんと吉井くんが壊した階段の踊り場の壁を直すのに駆り出されたって話だからね。他にも割れた廊下の蛍光灯の交換。ｅｔｃ．」

「……」

和真は机に突っ伏して眠っており、清美は苦笑いを浮かべながら、本日も和真はFクラスに迷惑をかけられていると言うとひばりの顔を引きつる。

「それで、何があったの？　この状況のカズは簡単には起きないから、支倉さん得意のハリセンでもピコハンでも取り出して叩いてみたら起きるかもよ」

「そ、そんな事できないよ！？」

清美はひばりに和真を起こすための方法を提案するとひばりは和真の状況にそんな事はできないと声を上げた時、

「……うるさいな。朝から早かったんだから、寝かせろよ」

「結城君、お客様よ」

和真は目が覚めたようで欠伸をしながら身体を伸ばすと友香はひばりがきている事を教えるが、

「……客？　どこに？」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

和真の目にはひばりの姿が映っておらずに首をかしげ、ひばりは和真の言葉に声をあげると、

「……あぁ。ごめん、寝起きだから、頭がぼんやりしてて目に入らなかった……で、何のよう？」

和真はかなり眠いようで目をこすりながら、ひばりに何しにきたのかと聞く。

「あ、あの。あたし、Ｆクラスの……」

「消えろ」

ひばりは自分が和真を訪ねてきた理由を話そうと最初に自分の名前を名乗ろうとするが『Ｆクラス』とひばりが言った瞬間に今までとは違いひばりの話を聞く気はないと冷たい声で言い、

「カズ、話くらい聞いてあげても良いんじゃない？」

「断る。俺は人の迷惑も考えないバカが嫌いだ。クラスでひとまとめにするなって言いたいのもわかるがあれだけ迷惑をかけられれば話なんて聞く気になれない。当然だろ。それにまた何かを壊したから修理しろって事だろ。俺の事をなんだと思ってるんだ。Ｆクラスはこの間、クラスの予算を使い切ったんだ。これ以上、知るか」

清美は和真の態度に苦笑いを浮かべるが和真はすでにＦクラス全体にかかわる気はないと言うとひばりを追い払うように手を振り、もう１度、机に突っ伏すと、

「で、でも、話くらい聞いてくれても」

「知らないって言ってるだろ。自分達で壊したものくらいは自分達で直させろよ。俺には１円も特にならないんだ。学校が終わったら、バイトもあるんだよ。朝から迷惑をかけられてるのにこれ以上、迷惑をかけるな」

ひばりは和真は悪い人ではないと理解したようでせめて話くらいは聞いて欲しいと言うは和真は聞く気はないようだが、

「失礼します。カズ君、いますか？」

「カズ、洋子先生がきたよ」

「……高橋先生、学園では結城でお願いします」

その時、教室のドアが開き、教室に入ってくると和真は直ぐに顔をあげ、

「……すいません」

洋子はつい出てしまったと言いたげに謝る。

「それで、どうかしましたか？」

「えぇ、先ほど西村先生から連絡がありまして、Ｆクラスの空調設備を修理して欲しいとの事です」

和真は洋子が自分を訪ねた理由を聞くと洋子は和真にＦクラスの空調設備を修理して欲しいと言うと、

「支倉さんの用事ってあれ？」

「……そうだけど、結城くんの様子じゃ、絶対に受けて貰えないよ」

「大丈夫よ。カズだから」

友香はひばりに和真を訪ねてきた理由がＦクラスの空調設備修理かと聞くとひばりは和真の様子じゃ聞いて貰えないと表情を暗くするが清美は苦笑いを浮かべ、

「……そうね。結城君、シスコンだから」

友香は和真は洋子の頼みは絶対に断らないと言い、

「どう言う事？」

「支倉、行くぞ。破損状況の確認をしないと修理もできない。時間がないんだ。急げ」

「えっ！？　ちょ、ちょっと結城くん！？　ど、どう言う事！？　放して！？　あ、あたし歩けるよ！？」

ひばりは友香と清美が何を言いたいかわからずに首を傾げた時、和真はひばりの首をつかむとひばりを引きずって教室を出て行き、廊下にはひばりの声が響いて行き、

「……今日もカズは通常運転」

「……最強のシスコンね。結城君を表すのに的確すぎる言葉よね」

友香と清美は2人の様子にため息を吐く。

第2問（前書き）

第2問は光闇雪さんのオリジナルキャラクターの『吉井　夕季』と『前田理音』のコラボ小説です。

特別問題と題してコラボを書くきっかけになった作品です。

舞台は明久達が文月学園に入学する少し前の話です。

光闇雪さんのファンの方達に怒られなければ良いなぁ。（苦笑）

第2問

「……こんな時間に誰だ？」

『前田理音』は取り組んでいた研究に一段落が付き、欠伸をしながら眠気覚ましのコーヒーを淹れているとめったにならない携帯電話が鳴り、

「……ユキか？　面倒だな。まあ、出ないと後でうるさいか」

理音は携帯電話のディスプレイを除くと幼なじみの『吉井夕季』からであり、理音は無視した方が後々で面倒になるため、溜息を吐くと、

「……何のようだ？」

「リオくん、何のようだ？　はないんじゃないですか？」

不機嫌そうに電話に出ると理音の態度に夕季は文句がありそうだが、

「……悪かったな。こっちは研究続きで寝てないんだ。くだらないようなら切るぞ。時間が空いたらかけ直してやる」

「そんな事を言って、リオくんは今まで自分から電話をかけてきた事なんてないでしょ。そうやって電話を切ろうとしてるんでしょ？」

理音は夕季のおしゃべりにあまり付き合う気もないようで面倒くさそうに電話を切ろうとするが、夕季には理音の考えている事はお見通しである。

「……それで、何のようだ？」

「べーつーにー、連絡１つくれない冷たい幼なじみくんは何してるのかな？　と思ったのと、後はこの間、文月学園の制服を着た写真を送ったのに感想はないのかな？　って」

理音は夕季に考えがバレている事にため息を吐いた後、彼女に向かい再度、要件を聞くと夕季は理音に４月から入学する事になった高校の制服を誉めて欲しいようであり、

「……ん。そう言えば、ＰＣのメールボックスにあったな。これだな」

理音はメール自体を読んでいなかったようでＰＣのメールボックスを開くと夕季からのメールには夕季と双子の兄の『吉井明久』が真新しい制服をきて並んでいる写真が添付されている。

「どうかな？　かわいく写ってるでしょ♪」

「別に、お前は何を着ててもかわいいだろ」

夕季は理音に話をふると理音は彼の性格なのが照れる素振りなど見せずに自分の考えを言う。

「……リオくん、もう少しさ」

「事実だろ。それにお前は『かわいい』なんて言われなれてるだろ」

「それでもストレートはちょっと照れるよ」

理音の言葉に夕季は苦笑いを浮かべる。

「しかし、あれだな。アキが受かる高校を受けたのか？　お前のレベルに合わないだろ？　と言うか、よく、アキを高校に入学できるくらいまで勉強させたな」

「リオくん、さすがに言い過ぎです。明兄だってやればできるんですから」

理音の一言に夕季は不服そうな声をあげると、

「悪かった。悪かった。そんな事で青筋をたてるな。アキのここぞって時の集中力は俺だって知ってる。それで、文月学園だったか？　……ん？　ここって確か」

理音は夕季に軽く謝ると写真とともに送られてきた夕季が通う学園の名前に何か引っかかったようで首を傾げる。

「やっぱり、リオくんは知ってるんですね？」

「あぁ、確か『試験召喚システム』とか言った特殊なカリキュラムを取り組んだ試験校だろ」

「はい。入学してすぐは使えないですけど、楽しみにしてるんですよ」

理音の言葉に夕季はよほど楽しみなようで楽しげに言う。

「ユキなら敵はいないだろ。あまり、やる価値があるとは思えない

な」

「そう言うのも楽しいんですよ♪　友達と協力する楽しさもありますから、進学校で1人で勉強するより、よっぽど楽しいと思いますよ」

「そうか？　俺にはわからんな」

夕季は進学校にはない魅力が文月学園にはあると言うが1人異国の地に来て研究をしている理音には意味がわからなく、

「まぁ、リオくんなら、そう言うと思ってたけどね」

「悪かったな」

夕季は理音の反応にため息を吐くと理音は不機嫌そうに言う。

「リオくん、怒らないでくださいよ。それより、今年はいつ日本に帰ってくるんですか？　おじさんのお墓参りに今年も帰ってくるんですよね？」

「……あぁ。帰るが」

「ちゃんと連絡くださいね。どうせ、おばさんにはまだ会う気はないんでしょ？」

「……あぁ」

夕季には理音の考えている事などお見通しだと言うと理音はバツが悪そうに返事をすると、

「なら、帰ってくる時はきちんと連絡する事、明兄とリオくんとわたしで3人でおじさんにあいさつしに行こう」

「……あぁ。わかった」

「約束だよ。後ね……」

理音はなんとか主導権を取ろうとするが、すでに夕季から主導権を取る事ができず、不機嫌そうに返事をすると夕季は電話の先で理音の考えている事もお見通しなのかくすくすと笑いながら夕季と明久の近況報告や理音の弟の『前田怜生』の話を夕季が話すのに飽きるまで理音は付き合わされる。

第3問（前書き）

今回の特別問題はＪＡＣＫさん『バカと天使と超能力者』より水野真琴と前田理音のコラボです。

時間軸は理音達が小学生の時代。

理音が変わった事件の後でＪＡＣＫさんの作品で真琴と優子が巻き込まれた誘拐事件です。

ＪＡＣＫさんのファンに怒られないければ良いなぁ。（苦笑）

第3問

「……リオ、あんた、またおかしなものを作ってるの」

「……別に良いだろ」

「よくないよ。リオも真琴もケンカしないでよ」

『前田理音』は幼なじみの『吉井明久』と『水野真琴』の2人と小学校の理科室に忍び込むと薬瓶などを無断で開け、何かの調合を始めている。

「……ねぇ。最近はこの辺で誘拐事件も多発してるし、帰ろうよ。リオの時のおじさんの事もあるしさ」

「……」

真琴は理音が何のために薬瓶から薬を調合しているかわからないためか、以前にその異常なまでの頭脳が原因で誘拐された理音を心配しているようで不安そうな表情をするが、

「……アキ、マコと一緒に帰ってやれ。俺は殺る事がある。後、マコ、これを持ってろ。俺は神仏など信じる気もないが気休め程度に持っていろ」

理音の目は誘拐犯に対する怒りで染まりながらも真琴の事は心配しているようで真琴に近所の神社の御守りを渡す。

「……リオ、確かに誘拐犯は許せないけど、リオの時とは違うんだ

よ。おじさんを……した犯人は捕まったんだから、リオが許せないのはわかるけどそれでリオに何かあったらおじさんは喜ばないよ」

「そうだよ。真琴の言う通りだよ」

理音の様子に明久と真琴は心配そうに言うが、

「これを……する事で……を発生させ……」

理音は完全に自分の世界に入り始める。

「……もう」

「あれ？　真琴、帰るの？　それなら、僕も帰るよ」

真琴は理音の様子に頬を膨らませると理科室を出て行こうとし、明久は真琴について行こうとするが、

「明久はリオについてなよ。まだ、時間も速いし、わたしは大丈夫だから、リオだって、また、狙われないとは限りないんだから」

「でもさ」

真琴は明久に理音を任せて1人で帰る事になるが、その後に自分の行動に後悔をする事になる。

真琴サイド

（……ここ、どこ？）

真琴は目を覚ますと自分は暗闇のなかに手足を縛られ、転がらせられている。

（リオと明久と別れてから、どうしたっけ？）

「今日の2人は上物だな。後でじっくりと楽しんでやろうぜ」

「あぁ、まったくだ」

自分の今の状況を思い出そうとすると暗闇の奥には灯りが漏れており、2人の男の声が聞こえる。

（これって誘拐事件だよね？）

「……ぅぅぅ。おとうさん、おかあさん、ひでよし、怖いよぉ」

真琴は自分が誘拐された事を冷静に理解したようで、落ち着こうと深呼吸するとこの場所には自分以外にもう1人の少女がいる事に気づき、

「大丈夫？」

「誰？」

「えーと、わたしは水野真琴よ。あなたは？」

「……木下優子」

真琴は少女と挨拶を交わすとお互いの不安を拭うように励ましあうが、

「そろそろ犯るか？」

「そうだな。お前、どっちが良い？」

「せっかくだ。1人を犯るところをもう1人に見せてから」

「お前、鬼畜だな」

男達のゲスな笑い声が聞こえ、真琴は優子と体をよせながら恐怖に体が震えた時、

「真琴、無事！！」

「……アキ、お前、いきなり真っ正面から入るな」

真琴の耳には聞き慣れた幼なじみ2人の声が響く。

「なんだ？　このガキ」

「あ？　ガキが2人きただけだろ。縛り付けて転がせとけよ。せっかくだし、見せつけてやろうぜ」

さすがに真っ正面から入ってきた明久と理音は男達に見つかり、男達は2人を捕まえようとするが、

「……しゃべるな性犯罪者」

「真琴はどこだ？」

2人はひく事がなく、
「まさか、こんなに早く使う機会があるなんてな。マコに発信機を渡しておいて正解だった」
理音の口からはとんでもない言葉が聞こえる。
「リオ、あんた、わたしを囮にしたわね！？」
「助けにきたんだ。文句を言うな」
真琴は理音に向かい叫ぶが理音が気にするわけはなく、
（……あいつ、絶対に許さないわ）
真琴の怒りが頂点に達した時、なぜか、真琴と優子を縛り上げていた縄が緩む。
「真琴ちゃん」
「う、うん。あの2人が注意を引きつけている間に逃げよう」
真琴と優子が逃げようとした時、強烈な炸裂音とともに光が大量に一直線に男達に放たれ、
「あだだだ！？」
「な、なんだこれ！？」
「お前達が生きていた証ごと、消し去ってやる」

理音は邪悪な笑みを浮かべながら、何かで男達を撃ち抜いて行き、

「真琴、大丈夫！！　……誰？」

「アキ、細かい事を気にしてるヒマはないぞ。早くここから出るぞ。閉じ込めないと試せないものもあるしな」

明久は真琴と優子を見つけ、理音はすぐにこの場所から離れるように言うと建物の中に怪しい薬瓶を投げ込み。

「そっちのも、手伝え」

「う、うん」

建物の入り口を閉めると入り口が開かないようにする。

「……リオ、明久、色々と聞きたい事があるんだけど、何、この用意周到なものは」

「助かったんだから、グダグダ言うな」

「えーと、僕もリオもだいぶ前からここに着いてたんだよね。さっき、リオが真琴に渡した御守りに仕込んだ発信機を手がかりに」

「さっさと助けなさいよ！？」

真琴は理音につかみかかるが理音は表情が変わる事なく、

「こいつと同じ日で助かったな。お前はついてる」

「あ、ありがとう」

理音はへたり込んでいる優子に手を伸ばし、優子はその手をつかむと安心したのか理音に抱きつき大声をあげて泣き始める。

「真琴、こいつを離してくれ」

「いやよ。明久、色男はおいて帰ろう」

「えっ！？　なんで？」

「良いの。少なくとも優子ちゃんの王子様はリオなの……わたしの王子様は明久だよ」

真琴は明久に聞こえないように言うと明久を引っ張って歩き出し、

「……俺にどうすれと言うんだ？」

理音は優子の反応にどうして良いのかわからずにため息を吐く。

第４問（前書き）

今回の特別問題は前回に引き続きＪＡＣＫさん『バカと天使と超能力者』より水野　真琴と前田理音のコラボです。

今回は理音と怜生の母親の葬儀の日の出来事です。

前回の続きでもあるため、優子と理音は知り合いになっています。

ＪＡＣＫさんのファンに怒られないければ良いなぁ。（苦笑）

第４問

「……リオ、やっぱり、帰ってこないのかな？」

「優子、ちょっとの間、怜生をお願い。明久、ちょっと、来て」

『前田理音』の母親の葬儀の日、２人は母親を失いたった１人で泣く事をガマンしている理音の弟の『前田怜生』を優子に預けると『水野真琴』は幼なじみの『吉井明久』を引っ張って行く。

「明久、怜生の前で余計な事を言わないで、今の怜生がどれだけ不安かわかっているの？」

「ごめん。軽率だったよ……でもさ。リオはやっぱり、おばさんの事を恨んでるんじゃないかな？　自分は売られて、行きたくもない外国に行く事になったって」

真琴は口調を強くして明久に向かい言うと明久は表情を暗くして言う。

「あいつだってわかってるでしょ。おばさんがリオを手放したのは日本じゃあいつを守りきる事ができないからだって、おばさんだって辛かったって事くらい。それがわからなかったら、何のための無駄に回る頭よ」

「……ボクだって、リオならわかってると思いたいよ。だけどさ……」

明久と真琴が口論を始めていると、

「アキくん、マコちゃん、２人はこんなところで何をしているんですか？」

「姉さん、リオは一緒じゃない……えっ！？」

「あ、玲さん、どうしてバスローブなんですか？」

理音と同じ大学にいる明久の姉『吉井玲』がなぜかバスローブ姿で立っており、

「どうして？　と言われると姉さんはここにくる途中で……」

「せ、説明は良いから着替えましょう」

玲の言葉を遮り、真琴は玲を着替えさせに連れて行くと、

「姉さんだけって事はやっぱり、リオはおばさんを許せないんだ……」

明久は実の母親の死に幼なじみが何も感じなくなってしまった事が悲しいようで唇を噛む。

「アキくん」

「姉さん、リオはどうしたんだよ。本当にリオはこないつもりなの？」

「ちょっと、明久、落ち着きなさい」

着替えてきた玲に明久は玲につかみかかるように言うと真琴が止めに入ると、

「で、でも」

「落ち着きなさい。玲さんだって、話す道筋って言うのがあるんだから、それで玲さん、あのバカはどうしたんですか？」

真琴は明久を落ち着かせようと話に割って入るが彼女自身もどうやら、理音が帰ってきていない事に腹を立てているようであり、冷静な態度を演じており、

「……何も、『研究があるからいけない』って、一言だけ」

玲は理音のなかにあった葛藤を見てきたため、2人に理音を責めて欲しくないとようでただ一言だけ言うが、

「あのバカ」

「ちょっと、真琴！？　どこに行くんだよ？」

「アキくん、マコちゃん、リオくんをよろしくね」

玲の話に真琴は限界がきたようで1人で歩き出すと明久は慌てて真琴の後を追いかけ、玲は2人なら理音を説得できると思っているのか2人の背中を優しげな目で見送る。

「決まってるでしょ。あのバカをひっぱたきに行くのよ！！　そして、怜生の前に引っ張り出すわ！！」

「ひっぱたきに行くって言ってもさ。いくら、真琴が超能力を使えると言っても、さすがにその距離は無理だよ」

「行くと言ったら行く。今なら、どこにも行ける気がするわ。見てなさいよ」

「そんなむちゃくちゃな」

明久は真琴の言葉にため息を吐くが、

「それじゃあ、行ってくるわ」

「待って、ボクも行くよ」

「どうして？」

「真琴もリオも普段、冷静なのに一度、熱くなると収集つかなくなるからね」

「それじゃあ、明久、行くよ。あのバカを迎えに」

「うん」

2人は真琴の超能力であるテレポートを使う。

理音サイド

「……」

理音は母親の葬儀に出ないと決めて玲に怜生の事を頼んだ日から特

に何もやる気にならないようでただ無意味な時間を消費している。
「……何もしないわけには行かないな。俺の価値はこれしかないんだから」
理音は立ち上がると研究の続きを始めようとした時、
「い、いたぁ」
「着地、失敗だね」
聞き慣れた幼なじみ2人の声が聞こえる。
「……アキ、マコ、お前らは何をやってるんだ？」
「リオだ。真琴、成功だよ♪」
理音は突如として現れた幼なじみにため息を吐くと明久は真琴を引っ張り起こすと、
「決まってるでしょ。リオ、用意しなさい。帰るわよ」
「むちゃな事を言うな。俺には帰る場所はここしか……」
「いい加減にしろ。あそこがリオの帰る場所だ。それとも、リオは僕や真琴がいる場所には帰れないって言う気か？　怜生くんだっているんだぞ。あの時のリオと同じ思いを怜生くんにまでさせるつもりか！！」
真子は理音に帰ると言うが理音は自分には帰る場所はないと首を振

るとその様子に明久は理音の胸ぐらをつかみ、

「結局、明久がキレてたら意味ないじゃない。リオ、明久、行くよ」

「あのなぁ。だから……」

「拒否権は認めないわよ。ねぇ。明久」

「当然」

真琴は自分より先に声を上げた明久の様子にため息を吐き、帰ると言い真琴と明久は理音の両腕をしっかりとつかみ逃がさないと言い、

「それに、怜生だけじゃなく、優子もあんたの帰り待ってるよ」

「……なぜ、あいつの名前が出てくる？」

真琴は理音を待っているのは怜生だけじゃないと笑うが理音にはその意味が理解できなく、

「それは木下さんが怜生くんの相手をしてるからじゃないかな？」

「……相変わらず、そろいもそろって鈍いわ」

真琴は昔から変わらない理音と明久の様子に苦笑いを浮かべると理音を明久と2人で押さえつけて無理やり日本に連れて帰る。

第5問（前書き）

第5問は新作です。
リザクさんの『バカとテストと極道娘』の福田夏帆と『嘘と話術とノラ猫』より黒須伐とのコラボです。

部隊は伐が停学中で振り分け試験を休み、夏帆が風邪をひいた組の人たちの食料を買いに来た時です。

夏帆は日本語がうまく使えないため、夏帆の言葉が間違っているところがありますがわざとですので修正報告は必要ありません。

リザクさんとリザクさんのファンの方に怒られない事を祈りつつ、特別問題出題です。

第5問

「これで良し。だけど……これ、運ぶの？」

『福田夏帆』は買い物を済ませて家に帰ろうとするが自分の買った荷物を見てため息を吐くと、

（何で、みんな全員で風邪引くのかな……持てない。重いよぉ）

買い物袋を４つ抱えて歩き出そうとするが夏帆の腕力では持ちあがる事はなく、

（タクシーを捨てるにもみんなの食糧を買ったから持ってきたお金は少ないし……うん。家まで帰れそうにないよ）

夏帆はタクシーを探そうともするが先ほど食料品を買ったため、財布の中身がさびしくタクシーに乗れそうにもない。

（一先ずはバスかな？　バス停まで……あれ？　確か、黒須くん？　今日は文月学園はフリカケ試験のはずなのに）

何とか買い物袋を持ち上げてふらふらとした足取りでお店を出ると視線の先には不良と噂される『黒須伐』と言う少年がタバコをくわえて立っており、伐の周りを街のチンピラ４人が囲み伐に因縁をつけているように見え、

（どうしよう？　でも、ここで助けに入らないとおじいちゃんの言う『仁義』と『任侠』に反するよね！？）

夏帆が伐の味方をしようと決意した時、伐は表情を変える事なく、くわえていたタバコをチンピラの1人のおでこに押し当てるとチンピラ達は何が起きたかわからないようで一瞬固まり、

「う、嘘！？　黒須くんって弱い！！」

伐はそのスキを見逃す事なく、表情を変える事なくチンピラ4人の膝を砕き、地面に這いつくばらせたチンピラ達の顔面を躊躇する事なく蹴り抜き気絶させると気だるそうに懐から新しいタバコを取り出して火を付け、夏帆はそんな伐の様子に何があったかわからないようで顔を引きつらせるが日本語の不得意な彼女は『強い』と『弱い』の意味を間違えたため、

「ん？　福田組の孫娘？　サボりか？　後、言葉が逆だ」

「ふぇっ！？」

伐は周囲の人間が自分を見ないようにしているなか、1つの視線に気づくとその先には夏帆が立っており、眉間にしわを寄せながら夏帆の言葉の間違いを訂正すると夏帆に学園に行かなくて良いのかと聞くが夏帆は伐に声をかけられた事に驚きの声をあげ、

「……おい。お前は何がやりたいんだ？」

夏帆は驚きのあまり声をあげた拍子に持っていた買い物袋の重さでバランスを崩して転びそうになるが伐はその手をつかんで彼女を支え、

「ご、ごめんなさい！？　あ、ありがとうございます。このご恩は一生を忘れません」

「……別にかまわん。お前を助ける事は俺に利があるからな。忘れないって言うなら、せいぜい役に立てよ」

「り？　役？」

夏帆は伐に助けて貰った事に礼を言うと伐は表情を変える事なく、自分には夏帆を助ける事で有益な事もあると言うが夏帆には伐が言っている事の意味がわからないようで首を傾げた時、

『お嬢さん、ちょっと良いかな？』

『少し付き合って貰えるかい？』

夏帆にいかにも極道（そっち）系の男2人が話しかけてくる。

「……おい。お前のところの人間か？」

「違うと思います。うちのみんなは本日、風邪を敷いて眠ってます」

「……そうか。それなら、潰しても問題ないな？」

「えーと？」

伐の頭は男達の様子にすでに夏帆をさらいにきた夏帆の実家の福田組と敵対する極道一家だと理解して夏帆に聞くと夏帆は今の状況が理解できていないようで小さく首を振り、福田組は全員が風邪でダウンしていると言おうとするが彼女は日本語を間違えており、伐は間違いに気づきながらもが訂正する事はなく、

「……だりぃ」

伐は状況を理解していない夏帆の様子に気だるそうにため息を吐き、

「……悪いな。俺達は今は忙しいんだ。あんたらにかまってるヒマはねぇよ。行くぞ」

「は、はい！？」

伐は夏帆の買い物袋２つを渡せと手を出し、夏帆は慌てて返事をする。

『お嬢さん、このお兄さんの身の安全を保障して欲しかったら、素直に付いてきて！？』

『くそガキ、何しやがる！！』

しかし、男達は２人の道を塞ぎ、夏帆に伐を人質にするぞと脅しをかけようとするが伐は表情を変える事なく、男の１人の股間を蹴りあげ、もう１人の男が声をあげるが、

「うるせえな。野良猫（おれ）にケンカ売る意味も知らねえって事は最近、勢力をのばしてきたって言うバカだろ。この街にお前らがいる場所はねえよ」

伐はくだらない話に付き合う気はないと言いたげに言うと、

「……極道だろうがなんだろうがこの街で猫を名乗る人間にケンカを売るな。それは死と同意だぞ」

伐は冷たく淡々とした口調で男達2人に言い、男2人は極道と言う特殊な人間ではあるが伐に威圧されて後ろに下がり、

「行くぞ」

「は、はい」

伐は夏帆に声をかけて歩き出すと夏帆は状況を理解したようで慌てて伐の後を付いて行き、

「あ、あの。黒須くんはどうして私を助けてくれたんですか？　私を置いて行けば巻き込まれなかったですよね？」

「……うるせえな。お前の家族がバカみたいに仁義だ。任侠だ。とくだらねえものを守ってるように俺には俺の守るべきルールがあんだよ」

夏帆は文月学園で聞く伐と今、自分を助けてくれた伐が重ならないようで伐に聞くと伐は自分のルールに従ったと言い、

「それで、これはお前の家まで運べば良いのか？」

「い、良いんですか！？　ってダメです。ウチはいろいろと問題がありますから」

「……別に、お前の家の事情なら俺は知ってるし、言って回る趣味もねぇよ」

「そう言えばそうですね。でも、良いんですか？」

伐は面倒そうに夏帆を家まで送ると言うと夏帆は自分の家が極道だと知られたくないため、声をあげるが伐は夏帆の家の事など知っていると言うと夏帆は少しだけ恥ずかしかったようで苦笑いを浮かべる。

「……仕方ねぇだろ。お前が1人で歩いてさっき見たいなバカにさらわれるとここが面倒な事に巻き込まれるだろ。ここにしか俺の居場所がねぇんだ。住処がなくなるって事を知らない奴にはどうでも良い事だけどな……なんだ？」

「……わかります。居場所が無くなるのは悲しいです。さびしいです」

伐は極道同士の争いが起きるのは面倒だと言うと伐の言葉のなかに夏帆のキズをえぐる何かがあったようで夏帆は目を伏せると、

「……ったく、めんどくせぇ」

「あ、あの？　黒須くん？」

伐は買い物袋を左手に2つ持つように待ち直すと夏帆の頭を乱暴だが優しく撫でると夏帆は何が起きたかわからないようで伐の顔を見上げるが、

「……弱みを見せるヒマがあったら顔をあげろ。下を見てるよりはいろんなものが見えるからな。それにお前は何かを失ったのかも知れないが他に多くのものを手に入れたんだろ」

「……そうですね」

伐は夏帆から視線を逸らしながらも夏帆を励まそうとしたようで普段見せる事のない優しげな笑みを浮かべると夏帆は小さく頷き、

「伐くん、ありがとね♪」

「……」

笑顔を見せると友好の印なのか伐を名前で呼び、抱きつこうとするが伐は夏帆の突撃を交わすと夏帆の手から買い物袋を2つを手から取り上げ、

「い、痛いです。よける事ないじゃないですか？」

「……バカな事をしてるヒマがあるならさっさと歩け」

夏帆は前のめりで転び、鼻を押さえるが伐は冷たい声で言うと1人で歩きだす。

第６問（前書き）

第６問は新作です。

ＧＡＵさんの『バカと雲雀と召喚獣』より、クリスティーナ＝ウェストロードと『嘘と話術とノラ猫』より、黒須伐とのコラボです。

今回はかなり恥ずかしいです。

クリスの性格違わない？　と思う方はＧＡＵさんの『夜の帳と野良猫と堕天使』をご覧ください。

ＧＡＵさんとＧＡＵさんのファンの方に怒られない事を祈りながら出題です。

第6問

「……ったく」

『黒須伐』は久しぶりのバイトもない休日に目を覚ますと自分のベッドのなかに潜り込んで小さな寝息を立てている『クリスティーナ＝ウェストロード』を見てため息を吐き、

（……カギ、替えるか？）

伐は変える気もないが一先ず、そんな事を考えるとクリスが目を覚まさないようにベッドから出て枕元に置いてあるタバコとオイルライターを手に取り、タバコに火を点けるとキッチンで朝食の準備を始めようとするが、

（……何もねえな。今日はバイトもないし、買い出しでもしてくるか？　……金、おろさねえと）

冷蔵庫の中身は何とか伐とクリスの2人分の朝食を作るくらいの食料しか入っておらず、食料の買い出しが必要だと考えるがサイフの中がさびしかった事を思い出して小さなため息を漏らすと、

「……伐？」

クリスが目を覚ましたようでベッドの中に伐がいない事に不安げな声で伐の名前を呼ぶ。

「……なんだ？」

「伐」

伐はクリスの声が聞こえたようで気だるそうに寝室のドアを開けるとクリスの頬には涙がつたっており、

「……ったく、お前は何がしたいんだ？」

「……ゴメンね。伐」

伐はクリスの元に移動すると眉間にしわを寄せながら彼女の頬につたう涙を指で拭うと彼女は小さな声で伐に謝りながら、伐に抱きつこうとするが、

「あう」

「……いつまでも甘えんな」

伐は表情を変える事なく、クリスの頭を押さえて彼女の行動を止めると、

「……お前は陽の当たる場所に戻るって決めたんだろ。それなら、いつまでもこんなところに戻ってくるんじゃねぇよ」

「で、でも……」

伐は眉間にしわを寄せたまま、クリスに向かい言うと彼女は不安そうな表情をし、

「……少なくともお前は顔をあげると決めたはずだ。支倉や吉井、あいつらとともに歩くんだろ。陽の当たる場所を歩くんだろ。なら、

何かある度にここにくるんじゃねえ。支倉や吉井みたいなお人好しが俺やお前のように日陰に落ちないように道を照らしてやるんじゃないのか？」

「……でも、私だって1人じゃ不安だよ。伐にそばにいて欲しいよ。あの子達は私と違って『穢れてない』から」

伐はそんなクリスの様子に彼女を突き放すように言うが、クリスは今にも泣き出しそうな表情で伐の服の裾をつかみ、

「……ったく」

「伐！？」

伐は小さく舌打ちをした後、クリスを抱きしめると伐の突然の行動にクリスは驚きの声をあげ、

「……お前は俺と違って穢れてなんていない。お前は人をきちんと思いやれるきれいな心（もん）を持ってる。俺にはないもの……俺がずっと昔に捨てちまったものを。だから、自信を持て、そんなお前を見てくれるヤツらがちゃんといるんだ。顔をあげろ」

「……伐、違うよ。伐は捨ててなんかいないよ。私の心は伐が救いあげてくれたものだから、伐は私より、ずっとキレイで優しい心を持ってるから、だから、私は……伐と一緒にいたい。2人で陽の当たる場所を歩きたい。1人じゃ怖いけど、伐と2人なら私は強くなれるから」

「……」

伐はクリスに向かい優しい声で言うとクリスは伐の言葉に小さく微笑むと伐は乱暴に自分の頭をかいた後、何かを決めたのかクリスの唇に自分の唇をそっと合わせる。

第７問（前書き）

どうも、作者です。

特別問題です。

今回はＧＡＵさんの『バカと雲雀と召喚獣』より『クリスティーナ＝ウエストロード』です。

第６問の前の話と言った感じでしょうか？

コラボと言うよりはｉｆです。

クリスにたいして作者の独自な解釈も入っているため、もしかしたら疑問に思うこともあるかな？と思いますが、ＧＡＵさんやＧＡＵさんのファンの方に怒られない事を祈りながら出題です。

嘘と話術とノラ猫特別問題『ｉｆ～２匹の捨て猫～』

どうぞ、お楽しみください。

第7問

（……またかよ）

『黒須伐』は目を覚ますと自分の布団のなかで裸で寝ている少女『クリスティーナ＝ウエストロード』を見てため息を吐く。

（……ったくよ。こんな事になるなら、拾わなければ良かった）

伐の布団のなかですやすやと気持ちよさそうに寝息を立てている彼女を見てもう1度、ため息を吐くと彼女を起こさないように布団から這い出し、

（……雨か？　こいつと会ったのもこんな雨の日だったな。あの日のこいつの目が昔の自分を思い出させたからか？）

外から聞こえる雨音に『クリスティーナ＝ウエストロード』と出会った日の事を思い出すと、少しだけ優しい笑みを浮かべて彼女の頭を優しく撫でる。

「……伐？」

「よう。お前は人の部屋に勝手に入り込んで何をしてるんだ？」

「ナニをしたのは伐にゃあじゃないのかなん？」

伐はベッドに腰掛けて彼女の頭を撫でるとクリスは目を覚まし、伐は彼女の行動にため息を吐くとクリスは伐をからかうように笑う。

「その喋り方を止めろ。痛々しくて腹が立つ」

「……うん。ごめんね。伐」

伐はクリスを見てもう1度、ため息を吐くとクリスは伐に向かい謝り、

「少しこのままで居させて」

伐に抱きつく。

「……ったくよ。勝手だな」

「うん。ごめん。勝手気ままはノラ猫の伐の領分だよね」

伐はめんどくさそうに言うが彼女を責める素振りも見せずにクリスの頭をそっと撫で、しばらく、何も会話もなく静寂が続くが、

「……うん。もう大丈夫だよ。ありがとね。伐」

「あぁ」

クリスは笑顔を見せて伐から放れると伐は彼女から何も聞く事なく立ち上がり、

「……簡単なものしか作れないが食ってくか？」

「うん。食べる」

冷蔵庫を開けて中身を確認してクリスに聞くと彼女は笑顔で頷き、

「なら、待ってろ」

伐はタバコに火を点けながら、簡単な朝食を作り始める。

「本当なら、私が作るんだよね？」

「お前が作ったって、俺は食えねぇんだ。余計な気を使うな気持ち悪い」

クリスはキッチンに立つ伐の後ろ姿を見て言うが伐はクリスの言葉を鼻で笑うと、

「いつまで、そんな格好してるつもりだ。今日から新学期……着替えに戻らなくて良いのか？」

クリスに着替えるように言うが、途中で今日から、文月学園の2年生に進級する事を思い出す。

「ちゃんと、制服も持ってきてるよ。他にも着替えもたくさん」

「……なんだ？　その荷物の量は？」

伐の言葉にクリスは制服に着替えながら答え、伐が振り向くとクリスが着替えている足元には彼女の着替えが詰められているのか大きなカバンが置いてあり、

「下着は結構、持ってきたんだけど、服はそんなにつめられなかったから、伐の服を貸してね」

クリスは笑顔で伐に言い、

「……ここに住む気か？」

伐はクリスの言葉で全てを察してため息を吐く。

「うん」

「あのなぁ……」

伐はクリスの返事にため息を吐くと、

「……お願い。伐のそばに居させて、伐のそばに居れば、私は私を保てるから」

「……ったく、ここに居ても、ただお互いのキズを舐めあうだけだぞ。俺とお前は似てるんだから」

クリスは伐の背中に後ろから覆い被さり、消え去りそうな声で言うと伐は呆れたようにため息を吐く。

「うん。でも、猫はキズを舐めて治療するんだよ。私も伐のキズを治すから……だから」

クリスの声は小さく消え去りそうであり、

（……ったく、そんな表情をされると『あの日の俺』と重なるだろ）

伐は彼女の脆さに『自分がノラ猫』になった日を思い出し、

「勝手にしろ。俺は夜に仕事もあるからな。戸締まりだけはしろよ」

ため息混じりで言うが、その声は優しい。

第8問（前書き）

今回はＧＡＵさんの『バカと雲雀と召喚獣』からＧＡＵさんのオリキャラ『支倉　ひばり』とのコラボ小説です。

舞台は理音が留学中に誰にも告げずに父親の墓参りにきた日の事です。

この作品は『ｉｆ～サドとちっちゃな幼なじみ～』を書くきっかけになった作品の１つです。

ＧＡＵさんやＧＡＵさんのファンの方に怒られなければ良いなぁ。

（苦笑）

第8問

「……」

『前田理音』は毎年、母親と会う事を避け、父親の命日から数日ずらして父親のお墓参りを行っており、今年も1人で父親に近況を話している。

「……また、くるよ。とうさん」

理音はいつまでも、日本にいるわけにもいかないため、立ち上がると、

「理音くん？　うそ、何で？」

理音の幼なじみである見た目が小学生の少女『支倉ひばり』が理音の顔を見て驚きの声をあげる。

（……ひばりか。変わってないな。と言うか、成長していないな）

理音はひばりとの再会に表情を変える事なく、彼女に1度視線を向けるが、まるでここには誰もいないと言う感じでひばりに声をかける事なく、歩き出す。

「ちょっと！？　理音くん、どこいくのよ？」

「……お前、誰だ？　俺は幼女に知り合いはいない」

ひばりはそんな理音を慌てて捕まえるが、理音は日本に帰ってきて

いる事を母親に知られたくないせいもあり、他人のふりをしようとすると、

「ちがうよ！？　あたし、そんなにちっちゃくないよ！？　あたし、理音くんと同い年だよ！！」

「……墓地で騒ぐな」

ひばりは理音の言葉に頬を膨らませるが理音が気にする事はなく、一言言うとひばりは１度、落ち込んだような素振りを見せるが、

「せっかくの再会なのにどうして理音くんはあたしをいじめるの？」

ひばりは理音にからかわれているのだと思い直し、理音を逃がさないと言いたげに頬を膨らませて理音の腕をがっちりつかむ。

「ふぇ！？　止まって、止まってよ！？　理音くん！？」

しかし、体の小さいひばりには理音を止めるまでの力はなく、理音に引きずられて行く。

「……やっと、止まってくれた」

「……お前、何がしたいんだ？」

「それはあたしのセリフだよ」

理音はしばらく、ひばりを引きずりながら歩いているが、疲れたようで立ち止まり、ひばりを見下ろしながら言うと彼女は頬を膨らませた後、

「理音くん、いつ、帰ってきたの？　いつまで日本に入れるの？おばさんには……会ってないんだね？」

「……あぁ」

理音との再会を喜んでいるようで、理音が答える間も与えずに質問していくが、母親の事を聞いた時に理音の顔が小さく歪み、ひばりは理音が今でも母親と仲直りしていない事を察する。

「……ねぇ」

「いかない」

ひばりは理音の様子に理音が彼の母親に売られたと思い込んでいると理解したようで理音の手をしっかりと握り言うが、理音からの回答は決まっている。

「何で？」

「あの人にとっては俺はとうさんを奪った人間でしかない」

「違うよ。おばさんは理音くんを守るために、理音くんを手放したんだよ。日本じゃ、また、理音くんが同じ目に遭うかもしれないから、留学先の人は理音くんをきちんと警護してくれるからって……」

理音は感情を排除したかのように無表情で自分は母親に憎まれていると言うと、ひばりは理音の考えは間違っていると目に涙を浮かべながら言う。

「……」

「理音くんだって、そんな事、わかってるはずだよね？　それなのに、どうして？　……ダメだよ。ケンカしたままなんて、さびしいよ。悲しいよ」

理音はひばりの言葉に何も答えずにいると彼女は何かを思い出しているようで、目からは大粒の涙が溢れ出して行く。

「……ひばり、お前が泣くなよ」

「だって……もし、理音くんとおばさんがあたしみたいに……」

「……わかってる。お前の言いたい事もあの人の考えも」

理音はひばりの様子に困ったように笑うと泣きじゃくるひばりの頭を優しく撫でる。

「理音くん？」

「だけどな。俺は振り返るわけにはいかないんだ。俺はあの人に会っちゃいけない。会うと俺が自分を保てなくなるから……あの人は会いに行けば俺を許してくれる。違うな。本当は憎んでなんかいない」

「それなら……」

「だからこそ。俺はあの人に会っては行けない。俺にはまだ資格がないから、とうさんを殺した罪から逃げ出しては行けないんだ」

理音はひばりの言いたい事はわかっているが自分にも譲れないものがあると真剣な表情で言うと、

「悪いな。研究を中断してきてるから、飛行機に遅れるわけにはいかないんだ」

「理音くん、待って！！」

「……だから」

「うん。わかってるよ。おばさんに会ってけなんて言わない。だから、１つだけ約束して」

ひばりは理音が言い出したら聞かない事も知っているため、理音を止める事を諦める代わりに何かを約束させようとする。

「……何だ？」

「日本に帰ってくる時は事前に連絡を入れる事、おばさんには言わないから、アキくんも理音くんを心配してるから、顔くらい見せて」

「……あぁ。気が向いたらな」

ひばりの言葉に理音は苦笑いを浮かべて頷いた後、

「じゃあな……違うな。またな。ひばり」

「うん。またね。理音くん」

理音はひばりの頭を優しく撫でると振り返る事なく歩き出し、ひば

りは振り返る事のない理音の背中に向かい笑顔で再会の約束を交わす。

第9問（前書き）

今回のコラボな特別問題はレフェルさんのオリキャラ『秋月　終夜』とＧＡＵさんのオリキャラ『支倉　ひばり』の２人とのコラボです。

設定としては、特別問題第８問の続きで、仮に理音が母親の死の前に日本に戻ってきたと言う設定で文月学園の入学式の日です。

レフェルさん、ＧＡＵさんやお二方のファンの人に怒られなければ良いなぁ。（苦笑）

第9問

（……おじさんから、美波も文月だって聞いたんだけど、あいつ、日本語がわからないだろうし、ＨＲが終わったら様子を見に行ってみるか？）

『秋月　終夜』は先日、日本に帰ってきたばかりの幼なじみの少女『島田　美波』が日本の学校で上手くやれるか心配しているようで、彼の耳にはＨＲの内容など入っていない。

「……前田　理音だ」

そんななか、１人の男子生徒の自己紹介に教室は静まり返る。

（……何だ？　名前しか言ってないのに）

終夜は教室の変化に気づいてその男子生徒を見るが特におかしな点は見えないが、

「前田くんは、先日までアメリカの方で生活していましたので、日本での生活になじむまで少し時間がかかると思いますので、皆さん、いろいろと協力してあげてください」

（……へぇ、美波以外にも帰国子女がいるのか）

担任が理音を帰国子女だと言うと教室がざわめきたち、理音に向かい何か英語で話せなどと言う茶々が入る。

『……黙れ。猿ども』

理音は鬱陶しいと言う感じで一言話すと教室内はざわつくが、その言葉は英語ではなく、

（……なぜ、ドイツ語？　それも発音完璧だし）

理音の言葉に終夜は苦笑いを浮かべる。

『……ほう。お前はこれがドイツ語だとわかるようだな』

『あぁ。昔、ドイツに住んでたんでな。だけど、さすがにケンカ腰すぎないか？』

理音は終夜の様子を見逃さずにそのままドイツ語で話し続ける。

『俺は群れないと何もできないバカが嫌いなんだ』

『……なるほどね』

理音の言葉に終夜は苦笑いを浮かべていると、

「前田くん、秋月くん、話は後にしてくれない？」

理音の隣に座っていた女子生徒が2人の会話に割って入る。

「悪い。えーと……」

「……木下　優子よ。自己紹介くらい聞いておきなさいよ」

終夜は苦笑いを浮かべて女子生徒に謝るが、理音が謝る事はなく、

席に座ると優子は文句があるようで理音を軽く睨みつけるが、

（……あいつ、図太いな）

理音が気にする事はなく、ＨＲは進んでいく。

（……終わった。美波のところでも行ってくるか？　……何で、前田と木下は揉めてるんだ？　と言うか、木下が一方的に絡んでるな）

ＨＲが終わると終夜は美波の様子を見に行こうとするが、先ほどの理音と優子が揉めている事に気づく。

「……」

「ちょっと、どこに行く気よ？」

「……お前に関係ないだろ」

理音は表情を変える事なく、教室を出て行くと優子は理音を追いかけて行く。

（水と油だな。俺も行こう）

終夜は２人が出て行くのを見送った後、自分も教室から出ると美波の教室に行こうと廊下に出た時、

「大丈夫？　前田くん、あなたも謝りなさい」

「ダイじょウブです。キニしないでクダさい」

理音に女子生徒がぶつかったようで優子が理音に謝れと言っている。

『悪かったな』

『！？　ドイツ語？』

理音はぶつかった女子生徒の発音に何かを感じたようでドイツ語で話し始めると女子生徒は驚く。

『美波、前田』

『ん？　秋月だったか？』

『終夜？』

終夜は理音のドイツ語を聞いて驚いている女子生徒は終夜の幼なじみの美波であり、２人に声をかける。

『前田、何でドイツ語だったんだ？』

『ん？　ドイツ人が日本語を覚え始めてる時の発音だったからな』

『ずいぶんと簡単に言うのね』

聞き慣れたドイツ語に先ほどまでこわばっていた美波は笑顔を見せた時、

「り、理音くん？　何でここにいるの？」

「ひばり、何を言ってるんだよ。リオが日本にいるわけな……リオ

！？」

教室から2人の生徒が出てきて理音の姿を見て声を上げる。

「なぜ、高校に小学生と女装趣味の変質者が居るんだ？」

「ちがうよ！？　あたし、そんなにちっちゃくないよ！？　あたし、理音くんと同い年だよ！！」

「趣味なわけないだろ！？　今日は寝坊して間違って姉さんの制服を着ちゃっただけだよ！？」

2人は理音の幼なじみの『吉井　明久』、『支倉　ひばり』であり、理音の言葉に声を上げる。

「……間違えねえよ。そんなもん」

「……まったくね」

「？」

明久の言葉に終夜と優子はため息を吐き、美波は日本語が聞き取れないようできょとんとしている。

「そんな事より、理音くんはどうして日本にいるの？　研究は？」

「そうだよ」

「研究？」

「あぁ。周りより頭のできが良くてな。この間まである研究施設にいてな」

明久とひばりの言葉に優子は首を傾げると理音は表情を変える事なく言い、

「はぁ！？」

『終夜、何を言ってるの？』

『通訳してやるから……』

『凄いのね』

終夜は苦笑いを浮かべ、美波は意味がわからないため、首を傾げると終夜は美波に理音の言葉を伝える。

「研究施設？　あの、ひょっとして前田くんって」

「えーと、一応は天才？」

「ひばり、なぜ、疑問系だ。研究は一段落したから、他のメンバーに任せた。ここにきたのはばばあが召喚システムをいじるのを手伝えって言うからな。お前らに言わなかったのはその方が面白そうだったからだ」

「ばばあ？」

理音の言葉に全員が首を傾げた時、

「この学園に住むう妖怪ばばあだ。わかりやすく言えば学園長だ」
理音の言葉にひばり、優子、美波は固まるが、
「確かにあれは妖怪ばばあだ」
「そうだね」
明久と終夜は納得する。
「理音くん、アキくん、そんな事言ったらダメだよ！？」
「ホントよ。前田くん、あなた、何を考えているのよ」
『終夜、言って良い事と悪い事が』
女性陣は慌てて言うが、
「お前ら、面白いなぁーと」
「吉井明久。明久で良いよ」
「秋月終夜。俺も終夜で良い。後、そっちも理音で良いな？」
「あぁ。構わない」
男性陣は馬があったようである。
「えーと、これはどうしたら良いの？」

「わからないよ。あ、あたし、支倉ひばりです」

「木下優子よ」

「シマだミナみ」

「島田さんは帰国子女で日本語がまだわからないんだって」

「そうなの？」

女性陣は苦笑いを浮かべながらお互いに名乗り会うと、

「ひばり、ボクは終夜とリオとファミレスに行く事にしたけど一緒に行く？」

「うん。あたしも行くよ」

『美波、お前も行くぞ』

『でも、言葉がわからないし』

『通訳は2人居れば充分だろ。会話は慣れだ』

美波は断ろうとするが理音と終夜が逃がすわけはなく、

「木下、お前もくるか？」

「……えっ！？　あ、あたしも？」

「木下さん、一緒に行こう」

理音は今まで見せなかった優しげな笑みを浮かべて優子に声をかけるとひばりは優子の手をつかみ。

「わ、わかったわよ」

優子は理音から視線を逸らしてうなづく。

第１０問（前書き）

今回は毎度お馴染みのＧＡＵさんのオリキャラ『支倉ひばり』とのコラボです。

設定は特別問題第９問の続き、入学して初めてのイベント清涼祭です。

ちっちゃい体で頑張るひばりは無理をしてしまいます。

そんな時に理音はどうするんでしょうか？

ＧＡＵさんやＧＡＵさんのファンの方に怒られない事を祈りつつ、特別問題スタートです。

第１０問

「……あれ？　ここどこ？　……怜生くん？」

『支倉ひばり』は目を覚ますと見なれない部屋のベッドで寝ており、ひばりの隣には幼なじみの『前田理音』の弟の『前田怜生』がひばりに抱きつき寝息を立てている。

（……えーと、確か、学園祭の準備をしてたはずだけど）

ひばりは自分が何をしていたか思い出そうとするが頭がはっきりとしない。

「……お姉ちゃん？」

「あっ！？　ごめんね。怜生くん、起こしちゃった？」

ひばりはが起きた事で怜生も目を覚ましたようで眠そうに目をこするとひばりは優しい笑みを浮かべて怜生に言うと、

「……大丈夫です。お兄ちゃん、お姉ちゃんが起きました」

怜生はベッドから這い出て理音を呼びに部屋を出て行き、

（……ここって、理音くんの家？　でも、この間、来た時と部屋の大きさも内装も違うよね？　まぁ、理音くんに聞けば良いか）

ひばりは理音の家だと考えるが先日来た時とは違うため、首を傾げた後、怜生の後を追いかけて行く。

「……お兄ちゃん、お姉ちゃんが起きました」

「ん？　あぁ、そうか」

「理音くん、あたし、どうしたの？」

怜生の後を追って、部屋に入ると怪しげな色をした薬瓶を持っている理音が立っている。

「ん？　覚えてないのか？」

「うん……」

理音は薬瓶が倒れないように専用の台に置き、怜生を抱き上げるとひばりは自分がここにいる理由を理音に聞く。

「まぁ、この部屋で話すのは危ないから、居間に行くぞ」

「あ、危ないの？」

「あぁ。いくつか頼まれている薬の調合中でな。混ざると有毒ガスが出るものもあるから」

「そんなところに怜生くんを入れたらダメだよ！？」

理音は表情を変える事なく、この部屋は危険だと言うとひばりは顔を真っ青にして理音を怒るが、

「怜生にはこの部屋に入る時の注意点は教えてある。アキが入って

くるより、ずっと安全だ」

「……お兄ちゃんの言う事は守ってます」

理音は表情を変える事なく言うと怜生は頷く。

「それでもね」

「良いから行くぞ」

「ふぇっ！？　理音くん、あたしは歩ける！？　歩けるよ！？」

ひばりはどこかズレている幼なじみの兄弟にため息を吐くと理音は怜生を背中におぶり、ひばりを抱きかかえて部屋から出ようとし、ひばりは理音の手のなかでジタバタすると、

「騒ぐな」

「うぅぅ。なんか。あたし、相変わらず、子供扱いされてる」

「いや、1部分だけは充分に大人だ」

「理音くん！？」

ひばりは理音の行動に涙目になるが理音はひばりのある部分を強調するとひばりは声をあげるが理音は気にせず、ひばりと怜生を抱えたまま、居間に移動する。

「少し待ってろ。コーヒーが良いか？紅茶が良いか？　……牛乳だな」

「何であたしの身長を見て、牛乳にするの！？」

「冗談だ。だいたい、牛乳を飲めば身長や胸が大きくなると言った科学的根拠はない。お前の胸はお前の資質だ」

理音はひばりと怜生をソファーの上に下ろした後、ひばりに何を飲むかと言うが途中でひばりをからかいだし、ひばりは頬を膨らませる。

「……牛乳、関係ないんだ」

「あぁ。カルシウムが仮に身長に影響あるなら日本人は牛乳より小魚の方が効率的だ」

ひばりは牛乳にあまり効果がないと知るとそれなりにショックのようだが、理音は気にする事なく言う。

「それで、どうする？」

「えーと、コーヒーよりは紅茶が良いけど、理音くんってコーヒー党じゃなかった？　何で紅茶があるの？」

ひばりは理音が紅茶を飲む印象が無いため、不思議そうに聞くと、

「ん？　優子がコーヒーより、紅茶が良いと言うからな」

「へぇ。木下さん、ここに来てるんだ」

理音の言葉にひばりは幼なじみの理音の恋愛事情を聞いてニヤニヤ

と笑うが、

「たまにな。怜生の面倒も見てくれるし、助かってる」

理音の表情は変わらず、理音はキッチンに向かう。

「ほら」

「ありがとう」

理音はひばりの前に紅茶を置き、怜生にはオレンジジュースを置くと自分もソファーに座る。

「あのね。理音くん、あたしどうしてここにいるの？」

「あぁ。学祭の準備で張り切りすぎて倒れたんだ。まったく、初めての学祭だからと言っても無理しすぎだ」

「そうなんだ。ごめんね。迷惑をかけて」

ひばりは今の状況を聞いて小さく肩を落として理音に誤ると、

「別に謝るな。お前のそばにいたのに気づかなかったアキが悪い」

「そんな事ないよ」

「あるな。俺は離れてた分、まだ、お前が無理してた兆候も発見出来なかったし、あいつが気づかないとお前の性格上、オーバーヒートするのはわかってたはずだ」

理音はひばりの頭を優しく撫でて言う。

「……ごめんね。理音くん」

「謝るなら、無理をするな。お前が中心で学祭の準備をしてるなら、お前に倒れられる方が指揮系統が乱れて回らなくなる。中心なら中心でどんと構えて……どんとはないな。小さすぎる」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

理音はひばりに無理をするなと言うが、その言葉はしまらない。

「それで、お前1人おじさんがいない部屋に帰すわけにも行かなくてな。家よりは近いし、俺の母親も今日は仕事で泊まりだから、俺のラボに連れてきたんだ」

「ラボ？」

「実験を住宅街でするわけにも行かないだろ」

ひばりは理音から出た言葉に顔をひきつらせるが理音には関係なく、

「下校時間になったら、アキ達も様子を見にくると言ってたから、少し休んでろ。俺は時間もそろそろだし夕飯を作る」

「あたしも手伝うよ」

「怜生、ひばりを押さえておけ」

「……はい」

理音はひばりに怜生を任せてキッチンに移動する。

「……みんなに迷惑かけちゃった」

ひばりは理音の背中を見てぽつりとつぶやくと、

「……お兄ちゃんも誰も迷惑だと思ってないです」

「うん。怜生くんありがとう」

怜生は落ち込んでいるひばりの頭を撫でるとひばりは怜生の体を抱きしめる。

第１１問（前書き）

今回はＪＡＣＫさんのオリキャラ『水野　真琴』、『水野　彩華』姉妹です。

舞台設定は強化合宿少し後ってところですね。
おばかな幼なじみ彩華に勉強を教える事になる理音です。

ＪＡＣＫさんやＪＡＣＫさんのファンの方に怒られない事を祈りつつ、スタートです。

第１１問

「……お兄ちゃん、お客さん」

「あぁ。こんな朝から誰だ？」

休日に『前田理音』は弟の『前田怜生』と朝食を食べて、しばらく、ゆっくりしていると家のインターホンが鳴る。

「……マコにアヤ？　こんな朝っぱらから何かようか？」

「まぁ、話は後よ。あがるわよ」

「おじゃまします。怜生くん、遊ぼー♪」

理音が玄関のドアを開けると幼なじみの『水野真琴』、『水野彩華』姉妹が立っており、用件を聞く理音を無視してまるで我が家のように居間に上がって行く。

「……それで、何のようだ？」

「コーヒー？　私、ジュースが良いな♪」

「ちょっと、彩！？　いくら、理音の家だからって、勝手に……」

「まこ姉、オレンジとアップル。どっちにする？」

「オレンジ」

「……お前らは本当に何をしにきたんだ？」

理音は真琴と彩華の前にコーヒーをおくが、彩華はコーヒーはお気に召さなかったようで平然と理音の家の冷蔵庫を漁り、理音はその様子にため息を吐く。

「それで、お前らは何をしにきたんだ？」

「そうそう。本題なんだけど、ヤバいのよ」

「だから、何がだよ」

「彩の頭」

「今更言っても仕方ないだろ」

真琴と彩華が冷蔵庫から出してきたジュースを飲んで一息吐くと、理音は改めて2人が何をしにきたか聞くが、理音は2人がきた理由にまるでどうでも良いと言いたげに言う。

「あんた、まさか、彩を見捨てる気？　このままだと確実に留年よ」

「俺としてはアヤが編入試験が通った事が驚きだ」

真琴は彩華を心配するが理音はくだらないとため息を吐く。

「それで、あんたに彩の勉強を見て貰おうと思ったわけよ。私はどうしても甘くなっちゃうから、血も涙も枯渇してるあんたなら、彩が泣こうがわめこうが淡々と勉強教えれるでしょ」

「……それが頼む人間の態度か。何より、俺は無駄が嫌いなんだ。アヤに勉強を教えるだと？　それは瑞希に料理を教えると同意なくらい無謀だ」

「……確かに、そうなんだけどさ。このまま、行ったら、彩の将来が」

「大丈夫だよ。僕は学校を首になったら、理音くんに一生、面倒みてもらうから♪」

「……悪いな。俺の守備範囲は巨乳だ。幼女には興味がない」

「……あんた、それ、優子の前で言うんじゃないわよ」

「理音くんにふられた！？　怜生くん、慰めて」

「……よしよし」

「えへへ」

理音は彩華に勉強を教えるなど無意味だと言い切ると真琴は彩華を見捨てるなと言うが、当の本人のはずの彩華のノリは軽く、怜生に頭を撫でられて嬉しそうにしている。

「……あいつは同じ年のはずだよな？」

「……認めたくないけどね。それで、お願い」

「お前が教えれば良いだろ。だいたい、俺は人に物を教えるようにできてない」

怜生と彩華の様子に理音がため息を吐くと、真琴は必死に理音に頼み込むが理音は乗り気ではない。

「人に物を教えるようにできてないって言うけど、強化合宿でいろいろしてたでしょ。あんたの特別授業、評判良かったって話よ」

「……あれは習う側が良いからな。あれはダメだ」

「……確かに」

すでに怜生と完全に遊び始めている彩華を見て、理音はため息を吐くと真琴は苦笑いを浮かべる。

「……まぁ、怜生の勉強のついでに足し算から教えて見るか？」

「ちょっと、理音、怜生くん、足し算できるの？」

「あぁ。最近は自分でかけ算やわり算も勉強していてな。たまに勉強を見ているんだ」

「……彩、完全に負けてない。怜生くん、まだ幼稚園児よね？」

「あぁ。おい。怜生、アヤ、そこまでだ。勉強するぞ」

「いや！！　私は怜生くんと遊ぶの」

「……良いからこい。真面目に1時間勉強する毎に、クレープをおごってやる」

「クレープ！？　やるやる」

理音はなんだかんだ良いながらも彩華の扱いになれているようで餌で釣る。

「……彩」

「……真琴お姉ちゃん、僕達もお勉強しよう」

「そうだね」

４人でしばらく勉強をしているなか、彩華は怜生に算数を教わった事は言うまでもない。

第１２問（前書き）

今回は新作です。

由里さんの『バカとテストと本屋さん』の『永瀬夏樹』くんと『バカとテストと勤労少年』より『結城和真』とのコラボです。

由里さんや由里さんのファンの方に怒られない事を祈りつつ出題です。

楽しんでいただけたら良いなあ。

第12問

（……）

『永瀬夏樹』は昨晩焼いた大量のクッキーを手に教室に入れないでいた。

（……これを持って教室に入ったら、また、小山さんにからかわれるのかな？　でも、昨日の試召戦争は僕はあまり役に立てなかったし、謝らないと）

夏樹は昨日の午前中に開戦したBクラスとの試召戦争で召喚フィールドが数学や物理で展開されたため、自分があまり役に立つ事が出来なかった事もあり、そのお詫びとしてクッキーを焼いてきたため決意して教室のドアを開けようとした時、

「永瀬だったか？　そんなところで立ち止まって何してるんだ？」

「ゆ、結城君！？」

Cクラスを代表の『小山友香』とともにクラスをまとめ、Bクラス代表の『根本恭二』を奇襲により討ち取った昨日の試召戦争に功労者である『結城和真』が夏樹を見て後ろから声をかけると夏樹は突然、声をかけられた事に驚いたようで小さく身体を震わせた後、びくびくと少し怯えた様子で和真の方を振り向くと、

「何、驚いてるんだよ。それより、中に入らないのか？　ここで立ち止まってると邪魔だぞ」

「そうだね」

和真は夏樹が何に驚いているかも気にする事なく、教室のドアを開けて教室に入ると夏樹も和真の後を追いかけるように教室に入る。

「カズに永瀬君、おはよう」

「うーす」

「お、おはようございます。山下さん」

教室に入るとクラスメートの『山下清美』が2人に気づき、朝の挨拶をすると和真は適当に返事をしてカバンを机の横にかけ、夏樹は清美に深々と頭を下げると、

「カズ、挨拶はしっかりしなよ。永瀬君を見習いなさい」

「良いだろ。別にそれに朝から西村先生の手伝いしてたから体力が」

「てつじん先生のお手伝いですか？」

清美は和真と夏樹の挨拶の違いにため息を吐くが和真は本日も生活指導の『西村宗一教諭』の手伝いをしていたと言う。

「ん？　永瀬が西村先生を『鉄人』って呼ぶのは意外だな」

「え？　どうしてですか？　だってとても似合ってるじゃないですか。『哲人』は『知識が豊かで深く、徳のある人』と言う意味ですし、それに『鉄人』は『丈夫で力強い人』と言う意味ですよ。2つともてつじん先生を表現するのに適切な言葉です」

「……」

和真は夏樹のような真面目そうな生徒が西村教諭の事を『鉄人』と呼ぶ事が意外だったようで驚いたような表情で言うが夏樹には和真が何が言いたいかわからないようで自分が西村教諭を『てつじん』と呼ぶ理由を話すが現代文の苦手な和真には意味がわからないようで眉間にしわが寄って行き、

「永瀬君、カズは意味がわかってないよ」

「そうなんですか？」

「……現代文や古典は嫌いだ」

清美は和真の様子に苦笑いを浮かべると和真は文系が嫌いなため、眉間のしわはさらに深くなって行くと、

「カズは本を読むのが嫌いだからね。マンガとかも読まないし」

「そうなんですか？　もったいないですよ。本は知識の宝庫なんですから読んだ方が良いですよ。読みやすい本なら僕が！？　……すいません。調子に乗りました」

清美は和真が本嫌いだと言うと夏樹は実家が本屋だと言う事もあるため和真とは対照的に本が好きであり、和真にも面白いと思える本を薦めようとするが人見知りする夏樹はふと冷静になったようで和真に頭を下げるが、

「いや、別に気にしなくても良いし、それに永瀬、気になってたん

だけど、何で敬語で話すんだ？」

「き、気に障りましたか？」

「いや、そうじゃなくて、クラスメートなんだ。敬語は止めて欲しい。何か肩こるし」

和真は夏樹が自分に敬語を使う意味がわからないようで夏樹の顔を覗き込みながら言うと夏樹は和真を怒らせたと思ったようだが和真は苦笑いを浮かべながら敬語何か使わないでくれと言う。

「で、ですけど」

「本人は使わなくて良いって言ってるんだ。それに敬語って尊敬する人間に使う言葉なんだろ。俺は永瀬に尊敬されるような人間じゃないしな」

「そうそう。カズはどっちかと言うとやる気ない。ダメ人間だし。そうだ。ナツくん、私にも敬語いらないからね」

夏樹はそんな事はできないと言うと和真と清美は自分達には遠慮などする必要はないと言い、

「そ、そう？」

「あぁ……悪い」

「カズ、朝、食べてきてないの？」

夏樹は少し遠慮がちに確認した時、和真の腹の虫が盛大な悲鳴をあ

げる。

「……いや、食ったんだけど、朝から力仕事がメインだったから、身体がカロリーを求めてるんだ」

「そ、そうなの？　そ、それなら、これ、どうぞ」

和真は西村教諭の手伝いが予想以上に辛かったと苦笑いを浮かべて言うと夏樹はカバンから焼いてきたクッキーを取り出し、

「クッキーだ。ナツくん、また焼いてきたの？」

「は、はい。昨日の試召戦争は僕はあまり役に立てなかったので、お詫びです」

清美は先日食べた夏樹のクッキーの美味しさに嬉しそうな顔をして言うと夏樹は肩を落として言うと、

「気にしない方が良いよ。だいたい、役に立たなかったのは私も一緒だし、それにカズの奇襲を考えれば誰も役に立ってないでしょ。私達だってカズの行動を知らなかったわけだし」

「何だ？　上手く行ったんだから良いだろ。それにあれだ。『敵を騙すには味方ごと』と言うだろ」

「えーと、結城君、たぶん。それを言うなら『敵を騙すにはまず味方から』じゃないかな」

清美は夏樹に気にしないように言うと和真は夏樹のクッキーに手を伸ばしながら言うがその言葉は大きく間違えており、夏樹は苦笑い

を浮かべる。

「……カズ、あんた、それはないわよ」

「うるさい。それより、夏樹、クッキー貰うぞ」

「えっ！？」

「何だ？　俺には食わせられないか？」

清美は和真の間違いに呆れたように言うと和真は夏樹に訂正された時に止まった手を夏樹のクッキーに伸ばそうとするが夏樹は和真が自分の事を名前で呼んだ事に驚きの声を上げて和真は夏樹の反応に首を傾げ、

「ナツくんはカズに名前で呼ばれた事に驚いたのよ」

「そうなのか？　イヤなら戻すけど」

「べ、別にかまいません」

「じゃあ、それでよろしく。俺の事もカズでも和真でも結城でも好きなように呼んでくれ。君付けはなしな」

清美は夏樹の反応にくすくすと笑い、和真に今の夏樹の心境を話すと和真は夏樹に確認を取り、夏樹が頷くのを見て改めて夏樹のクッキーに手を伸ばそうとすると、

「カズ、ストップ！！　ナツくんのクッキーを食べるのにはルールがあるんだよ♪」

「ルール？」

「えーと、山下さん、ひょっとしてあれ？」

清美は和真を止めるとイタズラな笑みを浮かべて夏樹に視線を送り、夏樹は清美が何をさせるつもりか予想が付いたようで逃げようとするがすでに夏樹はクラスメート達に囲まれており、

「それじゃあ、ナツくん、カズ相手に行ってみようか？」

「ど、どうしてそうなるんですか！？　おかしいでしょ！？　男の子の和真相手はおかしいでしょ！？」

「大丈夫よ。きっと喜んでくれる子達も多いから♪」

清美は夏樹を押さえつけて和真相手に何かやるように言うが夏樹は全力で拒絶しているなか、

「美味」

和真は夏樹と清美の様子など気にする事なく夏樹のクッキーを口に運び、夏樹のクッキーの出来に感心したようで声を漏らす。

第１３問（前書き）

今回は新作です。

秋雨さんの『バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ』より『久遠光一』くんの兄『大神白夜』くんとノラ猫『黒須伐』とのコラボです。

設定としては秋雨さんの小説で『白夜が２学年に宣戦布告した後』です。

ファンの多い作品ですので怒られない事を祈りつつ出題です。

第13問

「……2年対3年の試召戦争ね。くだらねぇ」

「おい。黒須、くだらねぇじゃない。協力しろ。1人でも戦力が欲しいんだ。それにお前はかなり強力なカードなんだ」

『黒須伐』はFFF団が原因に起きた文月学園の2年対3年の試召戦争の経緯をFクラス代表の『坂本雄二』から聞き、気だるそうに言うと雄二は伐に協力するように言うが、

「知らねえよ。いつも言ってるだろ。俺が欲しかったら、出すものを出せ。ただで他人を助けるなんてただのバカだ。少なくともこれはお前らが考えたらずで動いた結果だろ。興味もねえよ」

「おい!!　……ったく、何でウチの学年はまとまりが悪いんだよ」

「……雄二、お主が言って良い言葉ではないのじゃ」

伐は興味などないと言い教室を出て行き、雄二は3年に対抗する手段が直ぐにまとまらないようで乱暴に頭をかくと『木下秀吉』は呆れたようにため息を吐く。

（……『大神白夜』ね。自分を神に選ばれた男とか言ってるんだったか？　後は『久遠光一』の兄貴だろ。ただの兄弟ゲンカじゃねえか。くだらねぇ）

教室を出た伐は2年に試召戦争を仕掛けてきた3年主席の『大神白夜』とその弟である『久遠光一』の関係を思い出して気だるそうに

ため息を吐くが何か考えがあるようでその足は白夜のいる3年Aクラスの教室に向かっており、

「……て、てめえ、黒須！！　何しにきやがっ！？」

「てめえ、何しやがっ！？」

「……息がくせえ話しかけんな」

3年Aクラスの教室の前に着くと清涼祭で文月学園の学園長『藤堂カヲル』の失脚を立てた竹原教頭の手ゴマとして動いた『夏川俊平』と『常村勇作』が伐の顔を見るなり、伐を怒鳴りつけるが伐は表情を変える事なく、2人の金的を蹴りあげて前かがみになって下がった頭を躊躇する事なく蹴り飛ばして2人の意識を刈り取ると、

「ほう。1人で3年Aクラスに殴り込みか？　慌てなくても後でしっかりと這いつくばらせてやるゴミクズ」

「……へえ、あんたが噂の『お・に・い・ちゃ・ん』か？　わざわざ、弟にかまって欲しいからって、学園を巻き込むなんてずいぶんなブラコンだな。素直に遊んで欲しいと言ったらどうだ？　兄弟でツンデレとか気持ち悪いからな。ブラコン兄弟」

その姿を見た1人の男子生徒は伐を見下したように言うと伐はその男子生徒が白夜である事に気づいたようで小さく口元を緩ませると白夜を見て挑発的な笑みを浮かべる。

「……貴様、『神に選ばれしこの私』を挑発するつもりか？」

「神に選ばれたね？」

白夜は伐の挑発になどのるつもりはないと鼻で笑うが伐はそんな白夜の言葉を鼻で笑い返し、

「その傲慢な態度。無慈悲な振る舞い。確かにあんたは神に選ばれた者なのかもな？　……だけどな。知ってるか？　神ってのは誰よりも『無慈悲で残酷な性悪』なんだ。神に選ばれたと勘違いした男を絶望に叩き落とすような事は平気な面をしてやるぜ……太陽を目指したイカロスは翼を焼かれて地上に落ちました。あなたの手は本当に太陽（かみ）に届きますか？」

「それがどうした？　その程度で揺らぐような才能など持っていなければ、下積みもしてはいない。そんな安い挑発に乗るものなど、そこで寝ている無能ども位だ」

伐は白夜の考えを笑うと白夜の目つきは鋭くなるが自分の才能に絶対の自信があるようで伐の言葉を鼻で笑い、

「へぇ、この程度の挑発には乗らないか？　まぁ、ここで簡単にのって来るなら俺が出るまでもなかったんだけどな……ただ、お前が神に選ばれたと言うのなら、神がもっとも愛したと言われているものはなんだ？　同じ神？　天使（かみのげぼく）？　それとも、不完全で善にも悪にもなりえる人間（おろかもの）？　お前にこの答えが解けるのかい？」

伐は白夜の態度や自信になど興味がないのか知った事ではないと言いたげに言うといつの間に白夜との距離を縮め、

「なぁ、お兄ちゃん」

「……」

白夜の耳元でささやき、白夜は伐の態度が目障りだったようで表情を変える事なく伐の顔面を殴りつける。

「やれやれ、本当の事を言われて怒ったのかい？　お兄ちゃん」

「……貴様、名前は何と言う？」

しかし、白夜の拳には伐を殴りつけた感触はなく、伐は気だるそうにため息を吐くと白夜は少し伐に興味が湧いたようで伐の名前を聞き、

「……黒須伐。別に覚えなくても良い」

「黒須伐か？　……光栄に思え。光一、吉井明久に続けてお前も認めてやろう」

伐は隠す必要もないと思っているようで気だるそうに名前を名乗ると白夜は伐を自分を更なる高みに登らせるためのエサであると判断したようで伐を見下したように笑い、

「そりゃ、光栄だね。ただ……」

伐は小さな笑みを浮かべた後、視線を鋭くすると、

「……知ってるか？　黒猫（おれ）が前を横切ったんだ。あんたは終わりだよ」

「それがどうした？　子猫ごときのもたらす不幸など、踏みつぶしてくれる」

今まで抑えていた殺意を解き放ち、白夜を威圧するが白夜は伐の殺意を鼻で笑い、

「……あんたがどんなルールで動いているかは興味もないがな。俺にも俺のルールがあるんだ……女を泣かせるのはベットの上でってな。お前が美春にやった事はつまらねぇよ。意識を刈り取るならせめて楽しませてやれよ。そっちの方が楽しめるだろ。直情的すぎるバカだが容姿と肢体(カラダ)はそれなりに良いんだ。きっと良い声で泣くぜ」

「……色欲か？　つまらん。怠惰に並びくだらないものだ」

伐は白夜のやり方はつまらないと言うと白夜は先ほどまでの伐への興味が失せたのか吐き捨てるように言うが、

「色欲(ラスト)、怠惰(スロウス)、暴食(グラトニー)、結構じゃねえか。人は堕落する生き物だぜ。その方が楽で良い。あんたも憤怒(ラース)と傲慢(プライド)と強欲(グリード)以外はいらないと言ったんだろ。ちょうどいいじゃねえか……だけどな。少なくとも強(う)欲(そ)は俺の領分だ。あんたには荷が重い」

「……食えぬ男だ。だが、その領分の強欲とやらは気に入った。この私が奪い取ってやろう」

伐は白夜の様子など興味もないようで気だるそうに言うと夏川と常村の顔面を踏み付けた後、教室を出て行き、白夜にも伐の本心(そこ)が見えなかったようだが何か感じる部分があったのかまるで新しい玩具を見つけた時の子供のように無邪気だが見た者が寒気を覚えるような冷たい笑みを浮かべ、

「奪い取るね。それは持っているものへの嫉妬だ。嫉妬するのは人(おろ)(かもの)

間の証拠だ。確かにあんたは多くの才能を持っていて日々の修錬で磨き上げてきたのも事実だろ。だけどな。足りないもの本当に欲しい感情(もの)があるから渇くんだ。その本質(なか)にある渇きの原因は何か理解できないとまた足元をすくわれるぜ……まぁ、それを教えるのはブラコンの弟とその相棒のバカの役目だしな。俺には関係ねえな」

伐は教室を出て背後から聞こえた白夜の言葉を鼻で笑うと頭をかきながら歩きだす。

第１４問（前書き）

今回はあづまさんのオリキャラ『保科　望』、『白石　沙耶』とのコラボ小説です。

あづまさんやあづまさんのファンの方に怒られなければ良いなぁ。（苦笑）

第１４問

（ここもか？　……どう言う事だ？　こんな、平穏な学園にオレ以外にも潜入しているヤツがいるのか？）

『保科　望』は一般生徒として紛れ込みながら学園を調査しているのだが、最近、学園の情報を集めるのに使用している盗聴器や監視カメラが知らぬ間に排除されている。

（……確かに、ここの召喚システムは世界で類を見ない画期的なものだ。それに使って見てわかったが、このシステムは危険だ。仮にオレのように何か目的が有って潜入しているような人間がいるなら……楽な仕事だと思って油断していたな。少し警戒をしないと）

望が気を引き締めたその時、

（……またか？）

「のぞむーーーー！！」

望の幼なじみの少女『白石　沙耶』が望に向かって一直線に駆け出してきて望は彼女を交わすと彼女は廊下を歩いていた１人の男子生徒に受け止められる。

「……白石、廊下を走るな」

「えへへ。ごめんね。マエダっち」

沙耶と男子生徒は知り合いのようで沙耶が男子生徒に謝っているの

を望が眺めていると、
「望が運命の恋人である私をちゃんと受け止めてくれないから、マエダっちに怒られたよ」
「だそうだ」
沙耶からとばっちりがくる。
「だって危ないし。そりゃ、避けるよ。そっちの……」
「望、前田　理音くんだよ。マエダっちは優子の『彼氏さん』だよ」
「嘘！？　木下さんの。あの人、プライド高そうだから、彼氏なんてできないと思った……殺気！？」
沙耶から『前田　理音』をAクラスの『木下　優子』の彼氏として紹介された望は優子の印象から彼氏などできないと思っていたようで本音が漏れてしまうと背後から殺気を感じる。
「……保科くん、今の言葉の意味を教えて欲しいんだけど」
「き、木下さん、どうしたの。そんなにピリピリして」
望が殺気が発せられている場所を振り返り確認すると小さな男の子の手を引いた優子が額に青筋を浮かべて立っている。
「まあまあ、優子も抑えなよ。怜生くんが怖がるよ。それに……」
望が優子の殺気に怯んだ時、優子の後ろから『工藤　愛子』が現れ、

優子をなだめた後、沙耶を叱るような視線を向け、
「沙耶ちゃん、保科くんに嘘を教えたらダメだよ。前田くんは優子の『旦那様』なんだから♪」
「そっか！？　ランクがもっと上だった♪」
楽しそうに笑いながら、優子をからかいに入る。
「違うわよ！？」
「酷い。こんなに大きな子供までいるのに」
「？」
優子は声をあげると愛子は楽しそうに男の子を抱きしめて優子を非難するように言うが、男の子は意味がわからずに首を傾げている。
「えーと？」
「前田　理音だ。保科　望で良いんだよな？」
「あっ！？　うん。よろしくね。前田くん……」
優子がからわれているなか、理音はその様子を気にするわけでもなく、望に挨拶をすると望は理音の顔に何かが引っかかる。
（……前田　理音？　どこかで聞いた名前なんだけど……えっ！？　ちょっと待て。この顔、何で、こんな大物がこんなところに居るんだ？）

望は以前に理音が載った記事を思い出したようで、日本にいるわけがない『天才』が文月学園にいる事に小さく顔をひきつらせる。

「ん？　どうかしたか？」

「い、いや。ねぇ。間違ってたらごめん。君って、あの前田　理音？」

理音は望の小さな表情の変化を見逃さなく、望に聞くと望は1度、深呼吸をして理音に聞き返す。

「ほぅ……霧島以外にも知ってるヤツがいるとは思わなかったな。まぁ、保科の推測している通りだ」

「……マジかよ」

理音は特に表情を変える事なく頷くと望は自分の仕事場に厄介者が現れた事に小さくため息を吐く。

「木下姉、工藤、白石、そろそろ、怜生を解放してくれ」

「あっ！？　ごめんね。マエダっち」

「……お兄ちゃん」

理音は望の事など気にせずに男の子を『怜生』と呼ぶと怜生は理音の隣に移動して理音の手を握る。

「3人とも、怜生の相手をしてくれて助かった」

「気にしなくて良いよ。それより、マエダっちは今日は何をしてたの？　Ｆクラス全員参加の補習には出てなかったみたいだけど」
理音が優子、沙耶、愛子の３人に頭を下げると、沙耶は理音が何をしてたかと聞く。
「ん？　ばばあから頼まれてな。学園にある盗聴器や監視カメラの排除だ」
（……！？　こいつかよ）
理音は当たり前のように答えるが、望を抜かした３人は理音の言葉が冗談だろうと思っているようで苦笑いを浮かべるが、望は自分の仕掛けた物も排除されているため、小さく顔を歪ませる。
「また、そんな冗談ばかり言って」
「冗談じゃない。まぁ、ほとんどは康太とＤクラスの清水の私物だったけどな」
「……その２人の名前だと本当っぽいね」
理音は冗談ではないと言うと、
「悪いな。そろそろタイムサービスの時間だから、俺は帰る……」
怜生と一緒に歩き始めるが、
「……最近の忍者は機械も使うようだな」

「！？」

望とすれ違う時に望の正体に気づいているようで小さくつぶやいて行く。

「前田、あたしも帰るわ」

「ボクは部活に行くね。沙耶ちゃんは？」

「望と一緒に帰る♪」

優子は理音の後を追いかけて行き、愛子と沙耶が話をしているなか、

「……厄介なヤツが来たもんだ」

望はめんどくさそうにつぶやくがその口元は緩んでいる。

第１５問（前書き）

今回のコラボはクロさんのオリキャラ『烏丸　大貴』とです。

設定としては理音は大貴と取り立てて友人ではありません。明久達がいるから、少し話をする程度です。

舞台はクロさんの『バカとテストと召喚獣～文月学園のカラス～』より大貴が父親と決着をつけようとしている数日前と言ったところです。

クロさんやクロさんのファンに怒られなければ良いなぁ。（苦笑）

第１５問

（……これはいったいどういう状況だ？）

「どうかしたか？」

『烏丸　大貴』は今の状況に苦笑いを浮かべながら、目の前にいる『吉井　明久』の幼なじみの『前田　理音』の顔に視線を送ると理音は大貴の視線に気づき表情を変える事なく聞く。

「いや、なんて言ったら良いのか。わからないんだけど……これはなんのバツゲームだ？」

「……知らん。文句はアキに言え」

あまり人付き合いが上手くない理音とは同じクラスでも特に話した事もなく、明久達と言う共通の友人をかいして少し話をする程度で、理音と教室に２人っきりにされても、何から話し出して良いかわからないようで苦笑いを浮かべたまま言うが、理音の表情は変わらない。

「あー、何か話はないのか？」

「ないな」

「なら、俺は帰って良いか？」

「……俺に言うな」

先ほどから、このやり取りの繰り返しである。

（……ちくしょう。明久、あいつはいったい何を考えているんだ？）

「何も考えて無いだろうな」

大貴は今の状況を作りだした明久に心の中で文句を言うが理音はそれにツッコミを入れる。

「……前田、人の考えを覗くな」

「……覗くなも何も口に出ていた」

「……マジかよ」

大貴は理音に向かい言うが口に出ていたようで理音は短く答えると大貴はため息を吐く。

「……なあ、今の状況になった理由に心当たりは本当にないのか？」

「俺にはない」

「……それは原因は俺だって言いたいのか？」

「あぁ。心当たりはないのか？」

大貴は明久が自分と理音を2人にした理由を改めて聞くと理音は原因は大貴にあると言う。

「……あぁ」

「……そうか。それなら、俺から言わせて貰おう」
大貴は何もないと言うと理音は今まで黙っていたのが嘘のように自分が話すと言うと、
「俺は別に烏丸と友人と言うわけじゃない」
「そこまではっきりと普通は言わないぞ」
「ん？　すまない。あまり、他人の心情は察せないんだ」
大貴のツッコミに理音は少しだけ困ったように笑う。
「まぁ、良い。それで本題ってなんだ？」
「あぁ……アキ達がお前が最近、おかしいと言うんでな。烏丸本家とそろそろ決着をつけるんじゃないかな。と思ってな」
「……っ！？」
理音の口から出た言葉に大貴は表情を一瞬、凍らせるとすぐに理音を睨みつける。
「勘違いするな。俺はお前が妾の子だろうが、興味はない」
「……前田」
「睨むな。アキ達がお前を心配してるからな。個人的には余所の家庭の事情に首を突っ込むほど暇じゃない」

大貴は理音の口から出た言葉にさらに眼光を鋭くするが、理音は気にせずに続ける。

「なら、関わるなよ」

「俺もそうしたいんだけどな。無視をしようとするといつまでも騒ぐヤツがいるんだ」

大貴は理音には関係ないから、首を突っ込むなと言うが理音は文句は他のヤツに言えと言うと、

「俺が編入してきてからの、烏丸本家とその傘下から、文月学園に不正アクセスが行われた記録だ。俺の編入前のものはデータベースから読み取った推測だから、使えるかはわからないが渡して置く」

大貴の前にＵＳＢメモリーを置く。

「……お前の目的はわからないが受け取っておくが礼は言わないぞ」

「何度も言わせるな目的などない。ただうるさいヤツがいるからだ。仮に礼を言う気になるなら、俺に言う必要はない」

大貴は理音の目的がはっきりしないがＵＳＢメモリーを受け取るが理音は大貴の態度に興味すら示さないが、

「……そうだな。代わりに言わせて貰おう。烏丸、お前は周りを頼る事を覚えろ。お前が思ってるより、あのバカ達は頼りになる。それとな。捨てようなんて考えるな。捨てた先には何もない。まだ手が届くならどんなに惨めでカッコ悪くても手を伸ばせ。お前が切り

捨てようと思っているのもはお前が思っているより、お前やお前の周りには必要なものだ」

大貴に向かい言うと理音は切り捨てたものに後悔があるのか少し寂しげに笑う。

「……考えておく」

「あぁ。俺の話はこれで終わりだ。悪いな。タイムサービスに間に合わなくなるから、俺は帰る」

理音は大貴の返事を聞くとすでに大貴の事などどうでも言いようで教室を出て行く。

「……タイムサービス？　あいつ、わけがわかんねぇな」

大貴は理音の言葉に苦笑いを浮かべた後、真面目な表情をすると、

「……前田、ありがたく使わせてもらう」

近づいてきている日を見据えて気合いを入れ直す。

第１６問（前書き）

今回はマロさんのバカとテストと優等生?より、『宮永来牙』、『宮永絵梨』の登場です。

設定は来牙と絵梨が恋人になった数日後と言ったところです。

マロさんやマロさんのファンの方に怒られない事を祈りつつ特別問題出題です。

第１６問

「来牙君、今日の映画楽しみだね……ねぇ、来牙君、あれって木下さんだよね。秀吉君以外にも弟さんがいたのかな？」

「そうみたいだけど、他に弟がいるなんて聞いた事はないぞ」

『宮永　来牙』は先日彼女になった血のつながらない妹『宮永　絵梨』とデートをしている途中の映画館で来牙を敵視する少女『木下　優子』が小さな男の子の手を引いて歩いているのを見つける。

「……イヤな事を思い出した」

「えっ！？　何かあったの来牙君？」

「……前に木下がショタコンだと言う話を聞いた事が有ってな。嘘だとは思うが」

「それが本当だとあの男の子、危ないんじゃないの？」

来牙は以前、どこかで聞いた噂を思い出すと絵梨が少し慌てた時、

「……宮永君、妹さん、おかしな事を言わないでくれる」

２人の会話に気づいたのか笑顔だが、額に青筋を浮かべた優子が２人に声をかけてくる。

「き、木下さん、こんにちは」

「えぇ。妹さん、こんにちは」
絵梨はお怒りの優子に少しだけ怯んだようで慌てて頭を下げると優子は笑顔のまま、絵梨に頭を下げる。
「珍しいな。お前が俺に声をかけてくるなんて」
「あんな事をこんなところで言われて何も言わずにいられると思う？」
「……あぁ。悪かった」
来牙はさすがに今回は自分達が悪いと言う自覚があるようで優子に謝ると、
「それで、その男の子は木下の弟か？」
優子に男の子の事を聞く。
「あたしに弟は秀吉しかいないわよ。この子は……」
「怜生、優子、悪かったな」
「……お兄ちゃん」
優子が男の子の事を来牙と絵梨に紹介しようとした時、クラスメートの『前田　理音』が優子と男の子の名前を呼び駆け寄ってくると男の子は理音をお兄ちゃんと呼び、
「前田の弟か？」

「えぇ」

「……前田怜生です」

「そうなんだ。よろしくね。怜生くん」

『前田　怜生』は来牙と絵梨に頭を下げる。

「ん？　宮永に宮永……なんと呼べば良いんだ？　今まで通り、宮永妹だと問題あるだろ」

「……何の事だ？」

理音は来牙と絵梨の顔を見て首を傾げると来牙は絵梨と付き合いだした事が理音からバレてＦＦＦ団から追われるのを避けたいため、惚けようとするが、

「お前らやったんだろ。２人からは未経験者の匂いがしなくなったんだが、俺の……いや、間違いない」

「理音、あんたはこんなところで何を言ってるのよ！？」

理音は表情を変える事なく、２人が一線を越えた事を言い当てると優子は顔を赤くして理音を怒鳴りつける。

「……前田、悪いけど、秘密の方向で頼む。ＦＦＦ団にバレると面倒だから」

「えっ！？　ちょっと待って！？　２人って兄妹でしょ。そんなの

って本当に」

来牙は理音に口止めをすると優子はそんなお話のなかだけの恋愛だと思っていた兄妹の恋愛に妄想の世界に飛び立とうとするが、

「話しても俺に得はないだろ。だいたい、当人達の問題だ。後、優子、妄想の世界に飛び立つのは勝手だが、この2人には血縁関係はないから、やるのなら問題ない」

理音は来牙の心配を鼻で笑い、優子を妄想の世界から引っ張り戻すと、

「べ、べつにそんな事してないわよ」

「そうか」

優子は慌てて否定し、理音は頷く。

「えーと、とりあえず、呼び方は今まで通りで良いよ。それより、前田君と木下さんはデート？」

「ん？　怜生がアニメの映画を見たいと言うからな。映画に着たんだ。優子とはそこで会った」

絵梨は話を変えようと理音に優子とデートかと聞くと理音は何もないと言うが、

「待ち伏せか？　木下、お前にもかわいいとこあるじゃないか？」

「う、うるさいわよ」

来牙は優子が理音と怜生を待ち伏せていた事に気づいたようで優子に声をかけると優子は来牙を睨みつける。

「それで、ヒマならと誘っただけだが、お前らに同じ質問をするのは無粋だな」

「うん。私と来牙君はデートだよ♪」

「おい。いきなり、くっつくな」

絵梨は理音の言葉に来牙の腕に抱きつく。

「……お兄ちゃん、そろそろ時間です」

「そうだな。悪いな。優子、行くぞ」

「あっ！？　う、うん」

怜生が映画の時間が気になるようで理音の服を引っ張ると理音は怜生を抱き上げ、来牙と絵梨に頭を下げた後、優子の手をつかんで歩き出し、

「前田君って、今の素でやってるのかな？」

「だろうな。絵梨、俺達も行くぞ」

来牙と絵梨は理音の姿に苦笑いを浮かべた後、自分達も歩き出す。

第１７問（前書き）

今回は秋雨さんの小説『バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ』より、『久遠　光一』とのコラボです。

優子は理音とは付き合っていないと言う状態で話を作らせていただきました。

ファンの多い作品ですから、秋雨さんに怒られたり、暴動が起きない事を祈りつつ出題です。

楽しんでいただければ幸いです。

第17問

（……なんだ。この空気は？）

『前田　理音』は弟の『怜生』が風邪をひいてしまい、2日ほど看病のために学園を休んでいたのだが登校してきてクラスの様子がおかしい事に気づき、

「……久遠、何があったんだ？」

「……前田、世の中にはその瞬間まで知らない方が良い事があるんだ」

そばにいた『久遠　光一』にこの状況について聞くと、光一は何も話したくないと言いながら、小さなメモ紙を理音に渡す。

（……なんだ？）

理音は光一がメモ紙を渡した事に何か裏があるのも感じて自分の席に座るとメモ紙を開く。

（……なになに、文月学園の放送部が女装コンテストを開こうとしている。その参加者に……）

理音は光一から見せられたメモ紙には女装コンテストを開こうとしている人間がおり、その見せ物になる男子生徒にFクラスからは『前田　理音』、『久遠　光一』、『吉井　明久』、『坂本　雄二』、『木下　秀吉』、『土屋　康太』の6人が選ばれており、光一はなんとしてもこれを阻止したいようで理音に協力を仰いでいる。

（女装だ？　それで瑞希と島田があっちに飛んでるわけか？　……ずいぶんとくだらない事をしてくれるな）

理音はこんなくだらない企画を企んだヤツらに制裁を加える事を決めたようで邪悪な笑みを浮かべると、

「……おい。瑞希、島田。こんなくだらないものを主催したのはどこのバカだ？」

「ちょっと、リオ！？　い、いきなり、何をするんだよ」

懐から花火を取り出すと躊躇する事なく、瑞希と美波に向け放ち、花火は彼女達の顔スレスレを通り抜けると理音のいきなりの行動に明久が声をあげる。

「そ、そうよ。いきなり、何をするのよ！？」

「黙れ。質問に答えろ。答えないなら、女だろうが関係なく撃ち抜く」

美波は理音に向け声をあげるが、理音は冷たく言い放つ。

「お、おい。前田、いくらなんでも」

「久遠、お前は過激派と言われてる割にはずいぶんと甘い事を言うな。俺は今、こんなくだらない事を企画したヤツらと俺達を生贄にしようとしたヤツらも同様に実験台にする事を決めたんだが」

久遠は理音の言葉にさすがにまずいだろと言うが理音は邪悪な笑み

を浮かべたまま言いながら、クラスメート数人に向け、理音特製の麻酔銃の銃弾を放っている。

「それとも、お前も実験台にしてやろうか？　まぁ、そんな貧弱な身体では投薬には耐えきれないだろうがな」

「……言うじゃねえか。確かにお前の言う通りだ。俺がそんなコンテストに出る必要はないな。何より、お前の射撃の腕を見せられて、学園１の銃マニアとしては負けられないからな」

理音の挑発と麻酔銃の射撃の精度に光一の何かに火が点いたようで、光一はニヤリと笑うとエアガンを取り出し、

「一先ずは憂さ晴らしからだな」

理音と同様に自分達を売ったクラスメートを撃ち抜くと、

「前田、俺にもお前の武器を貸せ」

「流石、学園１の過激派。らしくなってきたじゃないか」

楽しそうに笑い言うと理音は邪悪な笑みを浮かべる。

「それで、出すのか？　出さないのか？」

「悪いな。最近はエコの時代だから、あまり、重火器類は持ってないんだ」

光一がもう１度、理音に武器を出せと言うと理音はため息を吐きながら光一の期待にそえるものはないと言うが、懐からは次々と武器

が出てくる。

「……の割にはずいぶんいろいろと出てくるな」

「何、ただの護身用だ。殺傷能力はない」

光一は理音の懐から出た銃を1つ手に取るとまだ動いている裏切り者を撃ち抜くと、

「……凍ったね」

「なんなのじゃ？」

クラスメートは弾丸が当たった箇所から凍りついて行く。

「なかなか、面白い武器だな……前田、どこから攻める？」

「一先ずは主催者を知っていそうな腐女子に話を聞きに行くのが早いだろ。こいつらは何も知らないみたいだしな」

理音は躊躇する事なく、瑞希と美波を縛り上げると自白剤を2人に飲ませるが2人は本当に何も知らないようであり、心当たりのある知っていそうな腐女子『木下　優子』に話を聞きに行くと言う。

「……優子か？」

「なんだ？　振られた相手だとやりにくいか」

「……そんなんじゃない」

光一は眉間にシワを寄せるが理音は表情を変える事なく、光一が優子に振られている事を気にしていると言うと光一は何もないと言うがその声には動揺が見える。

「やりにくいなら、俺1人で行くぞ。お前は俺達と同じように生贄になっているヤツに協力を仰げ」

「……いや、それこそ、学園の爪弾き者の俺には向かないだろ。そっちはゴリラに任せる」

「誰がゴリラだ！！　やんのか、もやし野郎！！」

「上等だ！！」

理音の指示に光一は雄二が適任だと言うが雄二は光一の言い方が気に入らないようで光一を罵倒すると2人は睨み合いを始め出すが、

「……雄二、今は手を組むべき」

「そうだよ。秀吉はまだしも、ボク達は女装コンテストになんか出たくないんだから」

「……明久、ワシだって出たくないのじゃ」

明久と康太は光一とケンカを始めそうな雄二を押さえる。

「なら、俺と久遠で一先ずはAクラスの鎮圧。雄二は仲間を集めろ。たぶんだが、Bクラスの根本とCクラスの清瀬は協力してくれるはずだ」

「……根本？　あいつは女装趣味だろ」
理音の指示に雄二は顔をしかめるが、
「……お前らが最初の試召戦争で噂を流しただけだろ」
「そう言えば、そんな事もしたな」
理音はため息を吐くと雄二は苦笑いを浮かべ、
「康太と秀吉は情報を集めろ。アキは久遠のフォローだ」
「……了解」
「うむ」
「わかったよ」
理音の指示に明久、秀吉、康太は頷き、
「行くぞ。こんなくだらない事を企んだヤツらに俺達にケンカを売る事が死と同意だと言う事を教え込んでやる」
「あぁ」
「ちょっと、リオ、光一、待ってよ」
理音と光一はニヤリと笑うと教室を出て行き、明久は慌てて2人を追いかけて行き、

「……改めて思うがあの2人が組んでる時は敵に回らない方が良いな」

「……（こくこく）」

雄二と康太は3人の背中を見送りながら言う。

その後、Fクラスから始まったこの戦いは理音達が女装コンテストを主催した『新野　すみれ』と協力者全てを捕まえ、理音特製の自白剤を飲まされ校内放送で秘密を強制的に暴露させらた。

そのなかには『木下　優子』の名前もあったと言う。

第１８問（前書き）

今回は秋雨さんの『バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ』より、『久遠光一』くんに参加していただきます。

特別設定として、理音は優子と光一は愛子と付き合っているとさせていただきます。

ファンの多い作品なので怒られない事を祈りつつ、出題です。

楽しんでいただければ幸いです。

第１８問

「ねえ。理音」

「何だ？」

『木下優子』は文月学園の一室を自分の好きなように使っている自分の彼氏である『前田理音』を呼ぶと理音は怪しい薬品を混ぜながら返事をすると、

「……理音、今度は何を作ってるのよ？」

「ん？　久遠経由で霧島に渡る薬を作るついでに今度、認可が下りる予定の治療薬なんだが」

「……そんなものを一緒に作るの止めなさいよ。それに明らかに比重がおかしいでしょ。光一からの薬をついでにするべきでしょ」

「そうか？」

「もう良いわ。それで、坂本くんをどうするつもりよ？　と言うか、あんたも光一も何をやってるのよ」

優子はため息を吐きながら理音が作っている怪しげな薬品の行先を聞くと理音の返事に理音が作っているものが自分の幼なじみの『久遠光一』の依頼だと知り、肩を落とす。

「ん？　何をと言われても困るが久遠が雄二が素直になるのに必要なものだと言うんでな」

「……あんた、本当にそう思ってるの？　光一の場合、自分や吉井くんを坂本くんの八つ当たりから守るためでしょ」

「八つ当たりと言うのはあれだがな。基本的に雄二も久遠も意地になるからな。久遠が１度くらい負けてやれば上手く収まるとは思うんだが」

「……無理よ。光一だもん」

「だろうな」

理音は光一と雄二の争いを止める気はないようで優子がため息を吐くのを気にする事なく怪しい薬品を調合していると、

「前田、いる？」

「前田くん、協力してください！！」

「姫路さんに島田さん？　また、光一と揉めたの？」

『姫路瑞希』と『島田美波』が勢いよく研究室のドアを開けて入ってくると優子は２人がまた光一と揉めたと思いため息を吐く。

「揉めたじゃないわよ！！　あいつのせいでウチら坂本の愛人扱いじゃない！！」

「そうです。そのせいで翔子ちゃんにも嫌われちゃったんですよ！！」

「……なんだ？　その面白い流れは？」

「面白くないです！！」

「面白くないわよ！！」

光一は瑞希と美波を明久から引き離すために2人を雄二の愛人と言う情報を流すとその話題は学園中を駆け巡ったようだが、理音は自分の興味がないものには無関心なためまったく知らなかったようで首を傾げると瑞希と美波は大声を張り上げると、

「前田、頼んだものはできてるか？」

「優子、いる？」

瑞希と美波が怒っている原因になっている光一とその彼女の『工藤愛子』が研究室のドアを開ける。

「ん？　あぁ、できてるぞ……瑞希、島田、お前達はどうして、俺を久遠の方に押すんだ？」

「ほら、前田、あんたの無駄に攻撃力が高い花火で久遠を反省させなさい」

「……まったく、話が通じないんだが、なぜ、俺が久遠を攻撃しないといけない？」

理音は光一に頼まれた薬品を光一に渡そうとすると瑞希と美波は理音に光一を倒せと言うが理音は首を傾げ、

「……お前ら、まだ、反省してないのか？」

「あはは」

光一は瑞希と美波を睨みつけ、愛子は苦笑いを浮かべるが、

「何よ。あんたが悪いんでしょ！！」

「そうです！！」

「……状況がまったくわからないんだけど、光一、愛子、何があったのよ？」

「いつもの事だよ。坂本くんが姫路さんと島田さんを煽って吉井くんを攻撃するから」

「……はぁ」

瑞希と美波は光一が悪いと言い、状況のわからない優子は光一と愛子に説明を求めると愛子は苦笑いを浮かべたままいつも通りと答え、

「ちょっと、前田！？　何をするのよ！？　ウチと瑞希にじゃなくて、あんたが攻撃するのは久遠よ」

「そうです。スリッパで叩くなんて、酷いです」

理音は眉間にしわを寄せて懐からスリッパを取り出し、瑞希と美波の頭を叩き、研究室には小気味の良い音が響くと2人は理音を怒鳴りつける。

「……瑞希、島田、俺は何度も言っているよな。お前らがアキに攻撃をするのは筋違いだ。付き合ってもいないんだ。そんなお前らにアキの行動を制限する権利はない」

「……まったくだ」

「だけど、翔子ちゃんは」

「雄二と霧島は夫婦だ。お前らとアキは違う」

「……理音、代表と坂本くんはまだ夫婦じゃないからね」

理音はため息を吐きながら瑞希と美波には明久の行動をうるさく言う資格はないと言うと光一は頷くが瑞希と美波は不満げであり、

「まぁ、これは久遠にも言える事だがな」

「どう言う事だ？」

理音は2人だけではなく光一も悪いと言うと光一は理音を睨みつけるが、

「少し長くなるから座れ。悪いな。こんなにまとめての来客はめったにないからコーヒーをいれるビーカーが足りん。誰か2人マグカップで勘弁してくれ」

「えーと、普通はマグカップとビーカーの数って逆じゃないかな？」

「愛子、ここはそう言うところよ。学園長先生もここでビーカーでコーヒー飲んでるしね」

理音は立ち話もなんだから座るように言うとビーカーにコーヒーを注ぎはじめ、愛子は苦笑いを浮かべるが優子はため息を吐く。

「……それで、前田、俺がこのバカどもと同じってのはどう言う事だ？」

「決まってるだろ。お前はアキをどうするつもりだ？　最初は相棒と言っていたが、今は保護者気取りか？　そんな事をやっていればアキの成長は止まるぞ。お前はアキを守っているつもりかも知れないがな。それはやり方は違うがアキの行動を制限している。お前は一生、アキを守るつもりか？　その場合、お前とアキの関係はどうなる？　それは友人でも相棒でもない歪んだ関係だ。俺はアキと幼なじみで親友だと思っている。俺はアキと対等でいたいと思うからそんな関係は遠慮する。それに今のアキに何かある度にお前があいつをかばうような状況では優子やこの2人が妄想するような関係だと疑われても本来何も言えないはずだ。同性愛者疑惑は周りも悪いが、アキやお前にも十二分に問題がある。それに同性愛者疑惑が嫌ならアキと少しでも距離を開けて工藤といちゃついていろ」

「……理音、あんた、はっきり言いすぎよ。確かに光一も吉井くんに過保護すぎるとは思うけど、吉井くんはあたしと秀吉を抜かしたら光一に初めてできた友達なのよ。その辺も考慮して話してよ」

「それは知っている。俺だって周りにアキしかいない時期だってあったんだ。だからこそ、言っているんだ。友人と言うものに憧れていたから、過剰にアキを守ろうとしているのもわかる。だが、さっきも言ったが今の関係は友人とは言い切れないと俺は思う。この2人は言ってもわからんだろうが、久遠はこの2人にあそこまで言うんだ。他人の意見を聞きいれるくらいの了見はあるんだろ」

「……あぁ。確かにお前の言い分は間違ってないよ」

「そのわりには納得がいかないような顔だな。少なくとも俺は久遠光一と言う友人にはそう言う評価を付けているんだが、俺の評価は間違っているか？」

「……そこまで言われて引かないわけにはいかないだろ。俺も少し気を付けるさ」

光一は理音が自分と瑞希と美波と同類と言われた事が気に入らないようで理音を睨みつけたまま聞くと理音は明久と光一に流れる同性愛者疑惑は自業自得だと言い切ると光一に向かい口だけでは無いところを見せろと挑発的な笑みを浮かべ、光一は苦虫を噛み潰したような表情をすると理音はそんな光一の様子を見てくすりと笑い、自分も光一の友人だと言うと光一は理音の言葉に上手くのせられた気もするのかため息を吐き、自分の非を認めると、

「久遠、瑞希と島田の対処はしばらく俺に預けろ。少しはまともになるように言い聞かせる。聞きいれない場合は流石に雄二の愛人は霧島に悪いからな。こいつらにも同性愛者のレッテルを貼り付けてやる。康太やうちのクラスのバカどもに言えば1時間もかからずに広まるだろ。同性愛者疑惑はお前自身も経験しているんだ。話題性、精神的なダメージの高さもな。雄二がこの2人をアキにけしかける以上に同性愛者疑惑が広まれば、それなりにアキへのクラスのバカどもの攻撃も収まるだろ」

「……わかった。少しだけ待ってやるが、前田、お前がこの2人にそこまでやってやる理由が見当たらないんだが」

「さっきも言っただろ。先を決めるのはアキだ。俺でもお前でもない。それに俺にはブランクはあるがお前より、昔からアキを見てるんでな。お前の知らないアキの強さも知っている。それにこの2人だってお前の知らないアキを知ってるだろ。違うか。瑞希」

「は、はい。わ、私だって、前田くんや久遠くんに負けないくらい明久くんを見て来ました」

「う、ウチだってそうよ」

理音は瑞希と美波をしばらく預けろと光一に向かい言うと光一は理音がこの2人のためにそこまでやる理由がわからないと言うが理音は表情も変える事なく、明久に選択させるためだと言い切り、瑞希に話を振ると瑞希は大きく頷き、美波も瑞希に続くように言う。

「……その方向性が間違ってるから、こんな事になってるんだろ」

「確かにそうね」

光一と優子は2人の言葉にため息を吐くと、

「それで、前田くん、2人を預けろって言うけど、具体的に何をするの？」

「ん？　そうだな。しばらくは瑞希と美波を雄二と霧島から引き離す。まずは1ヵ月、雄二の口車にのらなかったら、これをやろう。次の1ヵ月は4歳だ」

「わかりました」

「わかったわ」

愛子は理音に具体的に何をするかと聞くと理音は懐から『明久３歳』と書かれたディスクを取り出すとよくに目がくらんだ瑞希と美波は直ぐに頷き、

「……この思考が完全にＦクラスよね」

「……言うな。優子」

理音と瑞希、美波のやり取りに優子はため息を吐くが光一もそれなりに有効だと知っているため優子から視線を逸らす。

第１９問（前書き）

今回はＧＡＵさんの『バカと雲雀と召喚獣』より、『支倉　ひばり』、『クリスティーナ＝ウェストロード』の２人とノラ猫伐とのコラボです。

ＧＡＵさんやＧＡＵさんのファンの方に怒られなければ良いなぁ。（苦笑）

第１９問

（クリス、遅いよ。１人でこんなところは不安だよ）

日も傾きかけてきた時間に『支倉　ひばり』は友人を待っている。

（雑誌に乗ってたから、美味しいんだろうけど開店時間が８時って食べ終わったらだいぶ遅くなるよね。断れば良かったかな？）

「あれ？　お嬢ちゃん、こんなところで１人でどうしたの？　家出？　なんなら、お兄さん達の家にこない？」

ひばりはみんなで行こうと言ったお店の事を思い出してため息を吐いているといつの間にかひばりの周りを３人の男が取り囲み声をかけてくる。

「すいません。待ち合わせをしてるんで」

「さっきから、見てたけどずっと１人だったろ。待ち合わせの人は用事できたんだって、お兄さん達と遊びに行こうぜ」

「そうそう。こんなところに１人で立ってるんだ。本当は俺達みたいのを待ってるんだろ」

ひばりはナンパだと気づき断るが男達は引く事はなく、それどころかひばりの腕をつかむと無理やり彼女を連れて行こうとする。

「放して！！」

「かわいい声だね。お兄さん達そそられるかも」

ひばりは力一杯腕を振るが彼女は体も小さいため、男の手を振り払う力はない。

「良いじゃん。良いじゃん。抵抗してくれた方が燃えるし、それよりさっさと行こうぜ」

男の1人の言葉にひばりの体は硬直するが、

「アキくん、助け……」

何とか助けを呼ぼうと叫ぼうとするが口を押さえられる。

「早いところ行こうぜ」

「ん～、ん～」

男達はひばりを連れて行こうとするが、

「……ったく、めんどくせぇな」

（あれ？）

ひばりの耳に聞いた事のある声が聞こえる。その声はやる気もなく、単純に厄介事に巻き込まれていると言う感じでひばりを心配しているような気配は一切ない。

「まぁまぁ、伐にゃあ、そう言わずにひばりんの好感度をあげるチャンスだよん♪」

「んなものはいらねぇよ。だいたい、まぁ、胸は悪くないが幼女を食う趣味はねぇよ」

ひばりはその声に視線を向けるとそこには待ち合わせをしていた友人の『クリスティーナ＝ウェストロード』と評判の悪いクラスメートの『黒須　伐』が立っている。

「へぇ～、あっちの2人もかわいいじゃん。3対3でちょうど……あつっ！？」

「……しゃべんな。息がくせぇ」

伐とクリスを見て、男達は2人も連れて行こうとするが、伐は男の言葉の途中で吸っていたタバコを男の額に押し付けると、

「……次は目だな」

表情を変える事なく恐ろしい事を言う。

「おい。お嬢ちゃん、オイタが過ぎるんじゃねぇか？」

「うるせぇな。盛ってるなら、1人で部屋でやってろよ。お前らみたいなバカがいるとめんどくせぇんだ。巻き込まれる身にもなれ」

伐は男達の相手をするのが心底面倒だと言うが男達はその言葉に殺気立って行き、ひばりを連れてく事より、伐を痛めつける事に移行する。

「ひばりん、大丈夫かなん？」

「クリス、伐くんは大丈夫なの？」

「大丈夫。大丈夫。伐にゃあにはこれくらいのもめ事は日常茶飯事だからねん♪」

解放されたひばりにクリスは駆け寄るとひばりは3対1の状況に心配そうにするがクリスは心配ないと笑うと、

「だいたい、この場所でノラ猫の顔を知らないようなもぐりがいる事におねーさんはびっくりだよん」

「ノラ猫？」

「伐にゃあの通り名みたいなものだよん。住処も持たずに自由に街を歩き回るノラ猫。街の裏まで知り尽くした『情報屋』。ノラ猫は捕らえようとすれば牙を向き、関わらなければ何もしない。裏の街の暗黙のルールかなん？　これがあるから、伐にゃあは周りに関わらない。深く関わると関わった子が危険だからねい♪」

ひばりに伐の事を話し出すと、

「余計な事を言うな。エセ外人」

伐は男達を追い払ったようで気だるそうにタバコをふかしながらクリスを止める。

「ひばりん、伐にゃあが怒るから、ここまでねい」

「う、うん」

「それじゃあ、ひばりん、行こうか？　伐にゃあ、エスコートよろしくねぃ♪」

「……あぁ」

クリスは伐に店まで案内しろと言うと伐は面倒そうに頷き、

「えっ！？　どういう事」

ひばりは伐が一緒にくる事に驚きの声をあげると、

「だって、目的のお店、伐にゃあのバイト先だしねぃ♪」

「えぇぇぇ！？」

「……うるせぇな。さっさとしろ。バイトの時間に遅れるだろ」

驚きの声をあげるひばりを見てクリスは楽しそうに笑い、伐はため息を吐く。

第２０問（前書き）

今回は伐とｒｏｃｋｌｅｓｓさんの『え？代表？私がですかぁ？！』より『音尾　奏』代表とのコラボになります。奏代表は小動物系の女の子です。今まで書いた事がないから上手く書けているかは不安ですね。（苦笑）

ｒｏｃｋｌｅｓｓさんやｒｏｃｋｌｅｓｓさんのファンの方に怒られない事を祈りつつ特別問題出題です。

第２０問

「……なるほどね」

「ど、どうですか？　何かわかりましたか？」

Ｆクラス代表の『音尾　奏』は先日、文月学園の学園長である『藤堂　カヲル』に渡された『白金の腕輪のプロトタイプ』の実験データを取り出すために学園長室に顔を出すとカヲルは奏の実験データはあまり参考にならないのかカヲルは眉間にしわを寄せている。

「……いや、わかっていた事だけど、あんたの召喚獣は支援型だからね。個人で使っても余りデータが取れないみたいなんだよ。誰か、データを取るのに協力してくれるような友達くらいいないのかい？」

「……」

カヲルは奏が１人で召喚獣を扱っても奏の支援と言う能力のデータは取れないと奏に協力者を探すように言うが、内向的で大人しい性格の奏にはクラスメートに協力を頼める相手はいなく、奏は申し訳なさそうに目を伏せてしまう。

「……仕方ないね。今の時間なら屋上にいるはずだから、音尾、悪いんだけど、屋上に行って、伐にあたしが呼んでるって言ってきてここに連れてきてくれないかい？」

「く、黒須くんですか？　む、無理です」

カヲルは奏の様子にこちらで協力者を用意すると言うとＦクラスに

所属している問題児である『黒須　伐』を呼んで来いと奏に言うが奏は雄二とともに奇策でFクラスを勝利に導きCクラスの設備を奪い取った伐が怖いようで小さく身体を震わせ、涙目になってしまう。

「……大丈夫さね。あんたは伐が苦手な部類の人間だからね。むしろ、優しくしてくれる可能性が高いよ」

「で、でも、黒須くんは流石に……」

「良いから、行ってきな。あんまり遅くなると困るだろ」

「は、はい！？」

カヲルは奏の様子に伐の生活態度にため息を吐くと伐は奏におかしな事をしないと言うが奏はどうしても伐を呼びに行く事はできないと言うがカヲルが語尾を強くしてもう1度、言うと奏は慌てて学園長室を出て行く。

（……どうしたら良いんだろう？　黒須くんは怖いよ。でも、学園長先生から頼まれた事だし）

奏は屋上の入口から恐る恐る屋上を覗くと伐は屋上で携帯電話を片手にタバコを吸っているが、奏は伐に声をかける事が出来ずに入口で小さくなってしまうが、

「……おい。用があるなら、そこに突っ立ってないでこっちにこい」

「は、はい！？」

伐は奏の気配に気づき、こっちに来るように言うと奏は声を裏返し

て返事をすると恐る恐る入口から顔を出す。

「……音尾？　お前が俺に何のようだ？　設備はＢには上げられねぇぞ。友香との同盟はお前も霧島も納得したはずだろ」

「そ、そうじゃないんです。あ、あの学園長先生から、黒須くんを呼んでくるように言われて」

伐は奏の顔を見て奏が自分に用がある理由がわからずに眉間にしわを寄せると奏は伐と１メートルくらい離れて立つとカヲルから伐を呼んで来いと言われたと答えると、

「……ばばあが？　音尾、ばばあに伝えろ。用があるなら……あぁ、わかったよ。行けばいいんだろ。行けば、行くぞ」

「い、良いんですか？」

「……早くしろ」

「ま、待ってください！？」

伐は奏にカヲルにここにくるように伝えろと言おうとするが、泣きだしそうな奏の顔を見て乱暴に自分の頭を掻くと面倒そうに立ち上がり携帯灰皿を取り出して乱暴に吸っていたタバコの火を消し、奏に従うと言うと奏は不安そうな表情で聞き返すと伐は不機嫌そうに返事をして１人で先に歩きだし、奏は慌てて伐の後を追いかけて行く。

第２１問（前書き）

今回はコラボではありません。

ノラ猫ｉｆの基になった作品です。最初は２話に分かれていましたが１つにまとめました。他より長いですが楽しんでいただければ幸いです。

第２１問

（……流石は元神童、木下とは役者が違うな）

伐はＦクラスからＡクラスに宣戦布告をしにきたＦクラス代表の『坂本雄二』とＡクラスの『木下優子』の会話を聞いてため息を吐くと、

「その提案受けるよ。その代わり、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね。お互い５人ずつ選んで、一騎打ち５回で３回勝った方が勝ち。って言うなら受けても良いよ」

「なんだ？　俺以外が出る事はないから安心しろよ」

優子は雄二の持ってきた代表同士の１対１の勝負にはのる事はできないと提案に条件をつける。

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ。これは競争じゃなくて、戦争だからね」

「……そうか。その条件を呑む代わりに、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

優子は笑顔だがこれ以上は引く気はないと言うと雄二は少し考えるとさらに条件を付けてくるのを見て、

（……このままじゃ。木下姉は飲まれるな。冷静に分析してあそこまで強気に出てくるのは嫁の弱みを付いて１勝、後は姫路瑞希と康太の保険体育だな……なら）

伐は雄二の提案に状況を分析するが優子は雄二からの条件に判断しかねているようで考え込むと自分のパソコンで何かを入力し、印刷を始めると、

「……その条件、飲んでも良い。木下、こいつ相手じゃ、お前は役不足だ、代われ」

「黒須くん？」

「……伐？」

優子が悩んでいると伐は優子の肩を叩き、交渉役から降りろと言うと優子は伐が出てきた事に意味がわからないと言う表情をし、Ｆクラスの『土屋康太』は伐の姿を見て伐がＡクラスにいる事に驚きの表情を隠せないようである。

「お前、何だ？」

「悪いな。元神童、お前の小癪な策は木下のような単純（バカ）には有効かも知れないが俺には効かない」

雄二は突如、横から入ってきた伐を見て怪訝そうな表情をするが伐は興味なさそうに言い、

「……そうか。改めて、Ｆクラス代表の坂本雄二だ」

「……黒須伐。別に覚えなくても良い」

雄二は伐の力量を見極めようとしているのか目つきを鋭くして名乗

り、伐はそんな雄二の視線など気にする事なく気だるそうに名乗ると、

「まずは木下が言った通り、お前じゃなく、姫路が出てくる事が危惧されるため、1対1の勝負には乗れない。そのため、5対5の勝負で先方、中堅、大将はFクラスが教科を決める。次方、副将はAクラスに決めさせて貰う。後はだれか、俺のパソコンのプリンターで印刷したものを取ってくれ」

「これ？」

「あぁ。大将戦が代表同士の1対1じゃない場合はFクラスを無条件で負けとすると言う事ともう1つ条件が書いてある。これに署名、捺印をして貰う」

Aクラスとして譲れない条件を話すと2枚の書類を取り出し雄二の前に置き、

「あぁ。それくらいなら……坂本雄二、ハンコはないから拇印で良いか？」

「あぁ」

雄二は2枚の書類に自分の名前を書き、伐はそれを受け取ると、

「坂本嫁」

「……呼んだ？」

「おい！？」

伐は書類の１枚をＡクラス代表の『霧島翔子』に渡し、雄二は意味がわからずに声をあげるが、

「坂本夫妻、婚約、おめでとう」

「……ありがとう。黒須は良い人」

「おい。それはなんだ？」

「ん？　ただの婚約届だ」

「……雄二、大切にする」

翔子は伐から渡された書類を大切そうに抱きしめる。

「どう言う事だ！？」

「あ？　サインした奴が文句言うんじゃねえよ。そうだな。文句があるなら、１つ勝負をするか？　Ａ対Ｆの試召戦争、負けた方が、１つ何でも言う事を聞く。お前らが勝ったら、これを取り戻せば良い」

「……その勝負、受けてやる」

伐は雄二は迂闊だと冷たい笑みを浮かべると雄二を挑発し、雄二は翔子の手のなかにある婚約届を取り上げたいようで伐を睨みつけると伐の挑発に乗り、

「……勝負はどうする？　今から始めるか？　午後にするか？」

「今からだ。明久、他の奴らを呼んでこい」

「う、うん」

伐は気だるそうにいつから試召戦争を始めるかと聞くと雄二は一刻も早く、翔子の手から婚約届を取り上げたいようで直ぐに試召戦争を始めると言い、クラスメートの『吉井明久』にFクラスの生徒を呼んでくるように言い、明久は直ぐにAクラスの教室を出て行き

「坂本嫁、Aクラスの5人を決めるぞ」

「……わかった」

伐は翔子を呼びつけると雄二達Fクラスの生徒から放れて、試召戦争に望む5人を選ぶと言いクラスメートを集合させる。

「……黒須くん、いったい、どう言う事？」

「うるせえな。お前が危惧していた。姫路対坂本嫁の勝負は防げたんだ。問題ねぇだろ」

優子は自分から交渉役を奪い取った伐に文句があるようで伐を睨みつけるが伐は気だるそうに問題ないと言うと、

「状況を話すぞ。Fクラスは先方は木下弟、次方はどう来るかわからないが中堅に土屋康太の保険体育、副将で姫路瑞希、大将に坂本旦那を持ってくるはずだ」

「黒須くん、何でわかるの？」

「5対5を木下が提案した時、坂本旦那は計算内と言う表情をした。木下はそれに気づいてなかったから、代わったんだ。元々、どんな手を使ったって常識知らずのバカに負けるつもりはないがな。ノラ猫(おれ)にケンカを売ったんだ。きちんと思い知らせてやらないといけねえだろ」

伐はFクラスの戦術に予想が付いているようで冷たい笑みを浮かべていると『工藤愛子』は伐になぜ、そんな事がわかるかと聞き、伐は優子から交渉役を取り上げた理由を話し、

「大将戦は坂本夫婦対決」

「……任せて」

「先方は木下姉弟対決。教科は相手が決めてくれるだろ。演劇バカの弟に負けるような事はねぇよな？」

「……えぇ」

「次方か副将は俺が出る。俺の相手は『姫路瑞希』を選ぶ」

「……黒須くん、悪いけど、君が姫路さんに勝てるとは思えないんだけど」

伐は自分は瑞希と戦うと言うと学年次席の『久保利光』は瑞希の相手では伐では役不足だと言うが、

「……別に勝つ必要はねぇからな。ただ、相手のペースを崩せれば良い。最初に木下も言っただろ。これは戦争なんだ。綺麗な手段(て)を

使う必要はねぇよ。後は勝手に決めろ」

伐はこれは戦争だと冷たい笑みを浮かべるとAクラスの生徒は伐の笑みに背中に冷たいものが伝ったようで声を失い、

「……それなら、黒須くんの予想が合ってるなら、ボクが中堅に出るよ。噂のムッツリーニくんと戦ってみたいしね」

「……それなら、もう一試合は僕が出よう」

「決まりね」

愛子と利光が残りの2戦に立候補し、Aクラスの試召戦争出場メンバーは伐、翔子、優子、愛子、利光の5人に決まり、

「まずは1勝。よく殺った、木下、これで返り血(あせ)でも拭いてくれ」

「ありがとう。へぇ、ハンカチ？　借りるわ。意外と黒須くんって紳士ね」

「えーと、優子、黒須くん、優子の弟くんの生命活動がDEADになってるんだけど」

A対Fの5対5の試召戦争が始まり、1戦目は伐の予想通りFクラスは優子の双子の弟の『木下秀吉』が出てくると木下姉弟の間では周りが入り込めない何かがあったようで優子の勝利宣言がされるが、愛子は目の前に表示されている結果に顔を引きつらせるが伐と優子が気にする様子はない。

「次方戦を始めます。代表の方、お願いします」

「それじゃあ、行ってくるよ」

「待て」

試召戦争を立会いをしているAクラス担任の『高橋洋子』から次方戦の呼び出しがかかり、利光が前に出ようとするが伐は利光を静止し、

「どうかしたのかい？」

「できれば、姫路とは次方戦で殺りたいんだよ」

利光は怪訝そうな表情をすると伐は次方戦で瑞希と戦いたいと言うと、

「坂本、お前は教科選択させない次方か副将で姫路を持ってきて1勝を取るつもりだろ。なら、俺はここで姫路瑞希を対戦相手として指名したい」

1歩前に出て瑞希を指名する。

「……それに俺達がのる理由はないな」

「別に出てこないなら、副将の時にやるから問題はない。ただ、俺はこんなくだらない勝負にいつまでも付き合っていたくもないんでね。さっさと負けて終わりたいんだ。それに他のザコに負けるよりは姫路瑞希に負けた方が恥ずかしくはないだろ」

「ちょっと、黒須くん、それって勝つ気はないって事」

雄二は伐の言葉の真意を測っているようで直ぐに伐の提案に乗らないが、伐はため息を吐きながら自分は瑞希に負ける事は前提だと言うと優子は声をあげるが、

「そう捕えて貰ってもかまわない」

「ちょっと、待ちなさい。そんな人をクラスの代表として出せるわけはないでしょ！！」

伐は否定する事なく、優子はさらに声を荒げると、

「それなら、誰か代わりに出るか？　姫路に負けて西村の鬼の補習を受けたいドＭがいるなら代わってやるが、ちなみに俺が手に入れた情報じゃ、姫路は昨日までの回復試験で総合教科で４０００点オーバーを出している。うちで勝てるのは坂本嫁くらいだ」

伐は瑞希の点数を調べ上げているようで誰か代わりに出るかと言うと伐から知らされた瑞希の点数の高さにＡクラス生徒もＦクラス生徒も信じられないようで誰も口火を切る事はなく、

「どうする？　俺は結果が見えてる勝負だ。ここでも副将戦でも良いんだが、次は保険体育で康太を出すつもりだろ。先に２戦しておけば、そっちには点数じゃ計り知れない観察処分者（バカ）がいるんだ。もしかしたら副将戦で決着が付くかも知れないぞ」

「……」

伐は雄二と瑞希を挑発するように笑うと雄二は自分の作戦を見透かしている伐の提案に乗るのが不安なようで何も言えずにいると、

「なるほど、ここまで言ってるのに踏み切れないなんてな。自分の策から外れると何もできないのか？　確かに戦術面ではそれなりに有能みたいだが、戦況は読めないバカとはな。こんなバカにのせられたお前らはやっぱり低脳だな」

「……坂本くん、私が出ます」

伐は雄二は乗ってこないと判断するようで今度はＦクラス全体を小馬鹿にすると瑞希は伐がＦクラスをバカにしたのが許せないようですっと前に出る。

「何だ？　バカをバカにされて怒るなんて姫路、成績は良くてもお前もバカだな」

「ちょっと待て！！　確かに僕らはバカかも知れないが姫路さんはバカじゃない」

伐は瑞希が挑発に乗ってきた事に小さく口元を緩ませるとさらに彼女を挑発するように言い、その言葉に明久を中心としたＦクラスは伐に向かいブーイングを上げ始めるが、

「……自分達がバカにされてる事は気付かないのね」

「そ、そうみたい」

優子と愛子はＦクラス生徒の反応に呆れたようにため息を吐くと、

「それでは次方戦はＡクラス黒須伐対Ｆクラス姫路瑞希で問題ないですね。黒須くん、教科選択をお願いします」

「あぁ。勝負は家庭科の限定テストだ。俺と姫路で『料理実習のテスト』と行こうか？　俺の負けは決まっているし、俺も可愛い姫路に睨まれているのは気分が悪いしな。判定員はFクラスの男子生徒にして貰おうか？　姫路みたいな可愛い女の子の手料理を食えるんだ。それなりに良い勝負だろ……姫路、吉井に良いところを見せる良い機会だろ」

「姫路瑞希、受けます」

洋子は伐に教科を選ぶように言うと伐は口元を緩ませたまま、家庭科の限定テストを選ぶと瑞希と耳元で彼女の殺る気を煽るように言い、瑞希は伐の言葉に顔を赤くし、伐の言う家庭科勝負で問題ないと頷く。

「ちょっと待て！！　そんな勝負、認められるか！！」

「そ、そうだよ」

「あ？　対戦者の姫路が了承してるんだ。問題ないだろ。ルール的にも問題はないだろ」

雄二と明久は瑞希の料理に何かあるのか叫び声をあげてルール違反だと言うが伐は口元を緩ませたまま、ルール的には問題ないと言い切り、

「……そうですね。確かに対戦する2人が納得していますし、ルール的には問題はありませんね。しかし、材料調達など準備に時間がかかりますが」

「待ちます」

「だそうだ」

洋子は試召戦争のルールブックを見返しながら、ルールには問題はないと言うが時間の事を考えると賛同できないと言うが、瑞希はすでに料理対決に火が点いているようで待つと言い、瑞希の手料理の実力を知らないＦクラス男子生徒達は歓声すら上げながら待つと言うが、対照的に雄二、明久、康太、秀吉の顔は真っ青になって行く。

「……それじゃあ、決まりだな。姫路、確認するぞ。俺との『１対１の料理対決。判定員はＦクラス男子生徒全員。どんな料理が出て来ても判定員は必ず食べる事』だ」

「はい。あ、あの。料理は２人で合わせた方が良いですか？」

「そうですね。材料の発注を考えると同じ方が良いかも知れませんね」

「それなら、男が女の手料理でぐっとくると言う『肉じゃが』でも作るか？」

「はい。お願いします」

伐は邪魔が入らないように１対１と言う事を強調すると瑞希は頷き、材料発注のために勝負品を『肉じゃが』に選び、

「ま、待て。この勝負、お前の負けと結果がわかっているなら、これは結果が見えている言う事で１勝１敗にして先に進もうじゃないか？」

「そうだよ。それが良いよ！！」
雄二と明久は声をあげるが、
「何だ？　姫路がここまで殺る気になってるんだ。それを邪魔するなんて、乙女心もわからないのか？」
「そ、それは」
伐は自分の思い通りに進んでいるため、口元を緩ませたまま言うと、
「そうそう。良い事を教えてやる。俺は新学期の2日目の昼休みに屋上で寝ていたんだ」
「そ、それが狙いか！？」
伐は雄二、明久、康太、秀吉が顔を青くしている理由（瑞希の料理腕前）を知っていると言うと雄二は伐の狙いにようやく気付いたようで声をあげるが
「代表以外が大将戦に出てきたら、『無条件でウチの勝ち』なんだよな？　しっかりと味わえよ。康太、代表の坂本」
伐の目的は最初から瑞希の料理で雄二と康太を戦闘不能にする事であり、これから起きる大量虐殺の光景を思い浮かべているようで楽しそうな笑みを浮かべる。

第２１問（後書き）

伐はよく屋上にいますから、瑞希のお弁当で死にかけた明久達を見ているはずです。
そして、雄二と康太を始末するために瑞希の料理を使う。
まあ、小説家さん達が瑞希の料理をバカにすることはしてもここまでの公開処刑はないでしょう。瑞希を守るためにＦクラスは死ぬのか、生きるために瑞希を負けされるのか彼らはどちらを選ぶんでしょうかね？（苦笑）

調理風景を見ると先生には止められるかも知れませんがどこか常識から外れている洋子先生なら、瑞希の化学式的な料理も納得する可能性もありますしね。（爆笑）
そして、それを見てＡクラスは誰も手を出さないが、化学式など知るわけのないＦクラスは死屍累々。（爆笑）

第２２問（前書き）

秋雨さんの『バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ』より、『久遠　光一』と『僕と歪んだ愛情表現？』より『吉井深秋』のコラボです。

秋雨さんに怒られない事とファンの多い作品ですから、暴動が起こらない事を祈りつつ、出題です。

いつもながら、批判、中傷は優しくお願いします。

第２２問

「ねぇ、くおんくん」

「何かようか？」

お昼休みになり、『久遠　光一』がいつもの固形食を制服から取り出すのを見て、『吉井　深秋』が声をかける。

「何かようか？　じゃないよ。そんなものばかりだから、くおんくんはよわっちいんだよ」

「……みあに言われる事じゃない」

料理を始めとした家庭科が得意な深秋には光一の食生活は納得ができないようで光一に言うが光一は興味なさそうに袋を開けると固形食を頬張る。

「あのね。そんな事を言わずにボクの話を聞いてよ。そんなものばかり食べてるから、ゆうじくんや他の人からも『もやし』とか言われるんでしょ」

「……言いたいヤツには言わせておけば良いだろ」

深秋はため息を吐くが光一はいつも持ち歩いているカバンが彼の武器であるエアガンを取り出し、手入れを始めるが、

「違うの。くおんくんのせいで栄養たっぷりのもやしがバカにされてるのがボクは許せないんだよ」

深秋は机をバンバン叩きながら、光一の事など知らないと言うと、
「俺はお前にとってもやし以下なのか！？」
光一は深秋の言葉に一瞬、呆気にとられるが、すぐに声をあげる。
「だいたい。くおんくんの夢は本物の銃を撃つことだって言うわりには体の準備ができてないんだよ。銃を撃ったの反動ってすごいんでしょ。撃った人間が吹っ飛ばされて、それはくおんくんの夢は実現した事になるの？」
しかし、深秋は光一の言葉など気にせずに日頃から思っていた事を言う。
「そのために必要なのは体力だよ。体を動かすのに食事はしっかりとらないとダメなの。だいたい、そんな体力のない状態で夜にゆうちゃんやあいちゃんを満足させられるの？」
「みあ、お前は昼間の教室で何を言うんだ！？」
「ボクの言う事を聞いてくれないなら、くおんくんがゆうちゃんにふられたのは不能だからって言って回るよ」
「止めろ！？　どんな脅しだ！！　だいたい、そんな事を優子に聞かれたら、俺や秀吉にまでとばっちりがくるだろ！！」
光一は深秋の言葉で自分の身に襲いかかるであろう優子の関節技に顔をひきつらせて叫ぶと、

「そうなりたくないなら、ボクの言う事を聞くんだよ。まずはくおんくんの体を見て、ボクがくおんくんに必要な栄養と簡単な料理のレシピを教えてあげるから♪」

「みあ、ちょっと待て！？　なんだ、その手つきは？　お前は俺に何をするつもりだ？」

深秋は両手をわきわきと動かしながら、光一との距離を縮めだし、光一は深秋の様子がいつも明久や秀吉にコスプレをさせる時と一緒だと気づき逃げ出そうとするが、

「言ってるでしょ♪　よわっちいくおんくんじゃ、ボクからは逃げられないよ。ほら、ご自慢の黒くて硬いものもボクの手のなかだからね」

深秋は光一を捕まえると彼に馬乗りになり、光一の制服に隠してあるエアガンやスタンガンを抜き取りエアガンの銃身を手でこすりながら笑うと、

「……明久、お主は光一を助けなくて良いのか？」

「秀吉だって」

「……あの状態のみあに近づくのは危険じゃからのぅ」

「そうだね」

深秋と光一の様子を見ていた深秋の双子の兄の『吉井　明久』と光一の幼なじみの『木下　秀吉』は光一を助けようとしない。

「ちょっと待て。明久、秀吉、見捨てるな！？」

「大丈夫だよ。痛くしないから……やっぱり、ウエスト細いなぁ……少し、うらやましいかも」

「止めろ！？」

光一は明久と秀吉に助けを求めている間に、深秋は光一の制服のＹシャツのボタンを全て外して言う。

『久遠に死の鉄槌を！！』

『俺達のみあちゃんを取り戻せ！！』

深秋と光一の様子にクラスメート達が怪しい覆面を被り叫び始めると、

「うるさいな。邪魔しないでよ」

「ちょ！？　みあ、お前、何をした！？」

「ロングヘアーのカツラを被せただけだよ。ひかりちゃん♪」

深秋はＦＦＦ団の相手をする暇はないと言いたげに光一にカツラを被せ、

『みあちゃんとスレンダー美人の絡み！？』

『眼福じゃぁぁ！？』

ＦＦＦ団は鼻血を吹き出し、倒れる。

「あ、あいつらは大丈夫なのか？」

「光一、心配するのは自分の事だと思うよ」

光一はＦＦＦ団の様子に顔をひきつらせると明久は苦笑いを浮かべながら、光一に声をかける。

「ふふふ。これで邪魔ものはいなくなったね。ひかりちゃんにはどんな服が似合うかな？」

「止め！？　止めろ！？」

教室には光一の悲鳴が響き、数日後にはムッツリ商会になぞの美少女『ひかりちゃん』の写真が出回ったと言う。

第２３問（前書き）

今回はあづまさんの『バカとテストと報告者』より、『保科　望』、『白石　沙耶』の２人と『僕と歪んだ愛情表現？』より、『吉井深秋』のコラボです。

あづまさんやあづまさんのファンの方に起こられない事を祈りながら特別問題出題です。

第２３問

（……何でこんな事になったんだ？）

『保科　望』は人目から逃げるように廊下を歩いている。

（……まさか、Ｆクラスにあんな隠し球がいるとは思わなかった）

事の始まりは望が暇つぶしにＦクラスを覗こうとした時、幼なじみの『白石　沙耶』が望の後を見つけた事から始まる。

（……またか？）

「望♪」

彼女の全力の突撃をいつも通り交し、

「ひどいよ。望」

「いつも言ってるだろ。あんな風に体当たりされたらケガするよ」

沙耶は自分の事を交わした望を非難するような目で見るが望は苦笑いを浮かべていると、

「さやちゃん、なにしてるの♪」

「保科君と白石さん？　どうかしたの？」

文月学園が誇るバカ兄妹である『吉井　明久』、『吉井　深秋』兄

妹が2人を見て声をかけてくる。

「いや、俺は通りかかっただけなんだけど」

「そうなんだ……」

明久は沙耶が望に抱きつこうとしたのを見ていたのか、望に向ける視線には徐々に黒い殺意(もの)が混じって行く。

「アキ兄、そうやってすぐに殺気を込めた視線を送るのは良くないよ……確かに保科くんはメガネを取ったら、美少女だけど」

「あのね。吉井さん、俺は男だから」

深秋は明久をいさめるように言った後、望の顔をまじまじと見て望を美少女と言うと望は肩を落としてため息を吐くが、

「さやちゃん、さやちゃん、のぞみちゃんには何が似合うかな？メイド服？　女史の制服？」

「みあちゃん、これは？」

深秋はどこからともなく女物の服を取り出すと沙耶は巫女服が気に入ったのか深秋に言う。

「巫女服はダメだよ。神職補佐だよ。のぞみちゃんを汚せなくなるでしょ？」

「ちょっと、吉井君！？　君の妹は何をするつもり！？」

深秋は沙耶に向かい言うと、深秋の言葉に望は背筋に冷たいものが伝いだし、自分の思っている事を気のせいだと思いたいのか明久に確認するように聞くが、

「……保科君、僕は逃げるよ」

「えっ！？　ちょっと、吉井君？」

明久は自分にとばっちりがくる前に退却を始めており、望は明久が逃げる様子に驚きの声をあげたため、逃げるのが1歩遅れ、

「のぞみちゃん、まずはこれからね♪」

「無理！？　無理だから！？」

深秋は手に近くのファミレスのウェイトレスの制服を手に望の形をつかむ。

（……逃げないと俺は男の尊厳を失う）

望は深秋の様子に自分の身の危険を察知すると、

「ごめんね。吉井さん」

「あれ？」

深秋に一言謝ると深秋に捕まれている手からすり抜けて駆け出す。

（……そして、今の状況か？　あの子はなんなんだ？　野生の勘って言うのかな？　どうして逃げ切れないんだ？）

望は逃げだそうとする度に深秋の気配を感じ、文月学園を出る事は出来ずにため息を吐くと、

「あれ？　保科君、こんなところで何をしてるの？」

「小山さん、静かに」

望のクラスの代表である『小山　友香』が望を見つけて声をかけ、望は友香に向かい静かにするように言う。

「何かあったの？」

「いや、ちょっと……ある人から逃げてるんだよ」

「ある人？　またFクラスの人達？」

望の様子に友香は呆れたようなため息を吐くと、

「確かにFクラスだけど……いつもより、質が悪い娘だよ」

望は深秋の様子を思い出しため息を吐いた時、

「の～ぞ～みちゃん、み～つけた♪」

「げっ！？」

「あれ？　保科君、みあと何かあったの？」

深秋は獲物を見つけた狩猟犬のような目つきで望の形をつかみ、友

香は深秋と望に何かあったのかわからず首を傾げると、
「みあちゃん、みあちゃん、この人がのぞみちゃん？　うん、似合うよ。絶対に似合うよ」
「玉野さん？」
深秋の後ろには深秋の腐女子仲間の『玉野　美紀』が立っており、望の女装姿を思い浮かべ目を輝かせている。
「のぞみちゃん、覚悟は良いね？」
「良い分けない！？」
「ゆうかちゃん、のぞみちゃんを押さえて♪」
「えっ！？　何？」
深秋は友香に望を押さえろと言うと友香は意味がわからずに首を傾げた時、
「ごめん。小山さん、埋め合わせはするから」
「えっ！？」
望は友香を深秋に押して自分は全力で逃げ出し、
「のぞみちゃん、待って、待たないと下まで女物に変えるよ♪」
「逃げないでください。のぞみちゃんに似合う服、たくさん用意す

るから♪」

「そんな事、言われて逃げないヤツはいないよ！？」

深秋と美紀は楽しそうに望を追いかけて行き、

「……何？　何があったの？」

意味のわからない友香はその場に取り残される。

その後、のぞみちゃんと言う謎の美少女の写真がムッツリ商会に並んだ事は言うまでもない

第２４問（前書き）

光闇雪さんの『バカとテストと召喚獣～ツインズ～』より『吉井夕季』をお借りしました。

今までのコラボとは少し色が違いますが楽しんでいただければ幸いです。

設定としては三つ子になります。上から明久、夕季、深秋です。

光闇雪さんとファンの方に怒られない事を祈りつつ出題です。

第２４問

（……抜き足、差し足、忍び足）

『吉井　深秋』は目を覚ますと三つ子の姉『吉井　夕季』を起こさないように部屋を出て行き、

「今日こそはアキ兄の……ふっふっふっ」

部屋から出た瞬間、良からぬ事を考え高笑いを浮かべてた時、

「……みあちゃん、今日こそは何なんですか？」

夕季は深秋の様子にため息を吐きながら深秋に声をかける。

「……ダッシュ♪」

「みあちゃん！？　ま、待ちなさい！？」

深秋は背後にお怒りの夕季の気配を感じながらも気にする事なく走り出し、夕季は一瞬、呆気にとられるがすぐに深秋を追いかける。

「みあちゃん、開けなさい！？　明兄、起きて！？　みあちゃんがみあちゃんが」

「ふっふっふっ、いくら、ユキ姉でも朝から超能力でドアや壁をぶち壊すなんて常識外れな事はしないはず。何より、この間、アキ兄に怒られたばっかりだしね♪」

深秋は目的の三つ子の長男の『吉井　明久』の部屋に入ると直ぐに鍵をかけ、不敵な笑みを浮かべると、

「アキ兄の幸せそうな寝顔♪　ユキ姉は見れずにボクの独り占め♪」

顔の筋肉をゆるませ、明久のベッドに向かい歩き出す。

「……みあちゃん、いい加減にしなさい」

「脅しなら聞かないよ。ユキ姉はアキ兄にまた怒られるのがイヤだから……あれ？」

「……みあちゃん、別にものを壊さなくてもこれくらいはできるんですよ」

深秋は夕季の脅しには屈しないと言うが、夕季は超能力のテレポートを使用して明久の部屋に入り込むとにっこりと笑いながら深秋に言うが額にはしっかりと青筋が浮かんでいる。

「明兄が起きるまで少しお話しましょうか？」

「……仕方ない。残念だけど、今日はアキ兄の寝顔は諦めよう」

夕季は額に青筋を浮かべたまま、深秋の肩をつかむが深秋は反省する事なく言うと、

「あれ？　……きゃあぁ！？」

「今日はユキ姉のコスプレタイムにしよう♪」

素早く夕季のパジャマを剥ぎ取り、夕季は深秋の手の中に自分のパジャマがあるのを見て手で下着を隠すようにしゃがみこむ。

「何が良いかな？　アキ兄の大好きな競泳水着とか行ってみる？」

「みあちゃん、何を言ってるんですか！？　私のパジャマを返してください！？　それに明兄にそんなマニアックな趣味はないです」

深秋はどこからともなく競泳水着を取り出すと夕季は明久に競泳水着のようなマニアックな趣味はないと言うが、

「そんな事ないよ。ほら、ここに『競泳水着もの』、こっちには『陸上部のユニフォーム』、ここにも、そこにも」

深秋は明久が夕季や自分に隠している保健体育の参考書の隠し場所全てを把握しているようで次から次と保健体育の参考書を取り出す。

「こ、こんなに？」

「ユキ姉、仕方ないんだよ。アキ兄も健全な男の子だから……ん？　新作見つけた♪」

夕季は積み上げられて行く保健体育の参考書に顔を赤くしていくなか、深秋は明久が新たに手に入れた保健体育の参考書を見つけると、

「ほほう。やっぱり、近親相姦は男の子のロマンだね」

「明兄はそんな趣味ありません！？」

ニヤリと笑い言うと夕季は声をあげるが、

「ユキ姉、これを見てもそんな事を言えるかな？」
深秋は夕季に明久の持っていた美人姉妹を屈服させている保健体育の参考書を見せる。
「そ、そんな！？」
「ユキ姉も認めなよ。アキ兄もボクとユキ姉から誘ってくるのを待ってるんだよ。まぁ、ユキ姉が何もしなくても、こんな証拠を見つけたんだから、ボクは行くよ♪」
夕季は明久にそんな趣味があったと知り、膝を落とすと深秋は明久との距離を一気に縮めるが、
「はっ！？　邪悪な気配！？」
明久は深秋の気配に身の危険を感じたようで目を覚ますとベッドから布団を投げ飛ばす。
「……ちっ」
「ちょっと、みあ、いつも言ってるけど、止めてよ！？」
「アキ兄、何を言ってるの？　こんなもの見せられたら、ボクは我慢できないよ」
明久は深秋にこんな事は止めてと言うが、深秋は明久の保健体育の参考書を手にして言う。

「どうしてそれを！？」

「アキ兄の考える事などボクにはお見通しなんだよ。ユキ姉、そろそろ決めなよ。まぁ、ユキ姉がいかなくても」

「みあちゃん」

「夕季、助けて！？　みあを止め……なんで、夕季まで下着なの！？」

明久は夕季に助けを求めるが夕季の姿に驚きの声をあげると、

「アキ兄、覚悟してね♪」

「明兄が望むなら、私、頑張ります」

「ちょっと、夕季、みあにだまされてるから、冷静に冷静になって！？」

深秋と夕季は明久との距離を縮め、明久は身の危険を感じてパジャマのまま部屋を逃げ出す。

第２５問（前書き）

光闇雪さんの『バカとテストと召喚獣～ツインズ～』より、『吉井夕季』と作者の小説『サドで邪悪な召喚獣』より、『前田　理音』、『前田　怜生』兄弟と『僕と歪んだ愛情表現？』の『吉井深秋』の共演です。

初の作者自身のコラボ作品？ですね。

吉井家は三つ子となり、上から明久、夕季、深秋の順になります。

光闇雪さんとファンの方に怒られない事を祈りつつ出題です。

第２５問

「……みあ、お前は何がしたいんだ？」

『前田　理音』は休日の朝、突如として現れた幼なじみ『吉井　深秋』が弟の『前田　怜生』を抱きしめて『ろうじょう』と書いた看板を持っている姿を見てため息を吐く。

「だって、ユキ姉がヒドいんだよ。ボクの大切なＢＬ本を捨てるって言うんだよ！！　だから、ボクは戦うんだ！！　ボクの権利を主張するために！！」

「……捨てるも何もお前がユキやアキにおかしな事ばかりするからだろ。だいたい、お前達の家の都合で俺や怜生を巻き込むな」

深秋は姉である『吉井　夕季』におかしな事をしたら、深秋の大切なＢＬ本を捨てると言われたようで、それを撤回させるための戦いだと言うと、理音があまりのくだらなさにため息を吐いた時、

「リオくん、みあちゃんが来てないですか？」

「お邪魔します」

深秋の三つ子の兄である『吉井　明久』と姉の夕季が家に上がってくる。

「アキ、ユキ、みあならこっちだ」

「リオくん、おはようございます。朝から迷惑かけてごめんなさい」

「みあ、何してるの？」
理音はため息混じりで2人を呼ぶと夕季は申し訳なさそうに理音に頭を下げ、明久は深秋の様子にため息を吐く。
「来てから、ずっと、あんな感じだ。だいたい、籠城くらい漢字で書けないのか」
「えーと、無理じゃないかな？　結構、難しい漢字だよ」
理音は早くどうにかしろとため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべて答えるが、
「そうか？　怜生は書けるぞ」
「本当に！？」
「本当ですか！？」
理音は『籠城』くらいなら怜生でも漢字で書けると言うと明久と夕季は驚きの声を上げる。
「りおくん、そんな風に話を反らしてもムダだよ。ボクが書けない字を幼稚園児のれおくんが書けるわけ……」
「……書けます。この間、お兄ちゃんに教えて貰いました」
深秋は怜生がそんな事ができるわけないと言うが、怜生はどうして、深秋が書けないのか不思議と言う表情をする。

「……ねぇ。リオ、子供って、時に残酷だよね？」

「そうだな」

深秋は怜生の言葉に固まると明久は顔をひきつらせて言い、理音は改めて、深秋の頭じゃ書けないなと理解したようで頷く。

「良いんだ。良いんだ。ボクは日本史が出来なくたって、未来を担うボクたち若者は過去なんか振り返っちゃいけないんだから！！」

「みあ、最近じゃ、戦国時代萌えと言うジャンルがあると優子から聞いたんだが」

「なんですと！？　そ、そんなジャンルが！？　ゆうちゃん、ボクには教えてくれないのに、何で、りおくんにだけ？　ずるい！！」

深秋は日本史など自分は知らなくても良いと言うが理音の言葉に深秋は驚きの声を上げる。

「……リオくん、みあちゃん」

「まぁ、そう言うゲームも増えてきたしね。それにリオの彼女は木下さんだし」

夕季は理音のどこで手に入れたかわからない偏った知識にため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべ、

「みあ、日本史も勉強するに値するってわかったよね。いつまでも、遊んでないで勉強するよ。今回も日本史が一桁だったら、宿題たく

さん出されてバイトや趣味の時間がなくなるからね」
深秋に日本史を勉強するように説得しだすが、
「で、でも……」
「戦国時代萌えには城萌えや甲冑萌え、なかでも武将萌えはＢＬ本も出て熱いそうだ」
「やる！！」
深秋はそれでも勉強はしたくないと言うが理音の攻撃は的確であり、ＢＬ本の一言に深秋はすぐに返事をする。
「……みあちゃん」
「ま、まぁ。夕季も良いでしょ。みあがやる気になったんだから」
夕季は深秋の態度の変わりようにため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべ、
「ユキ、みあもアキもだが、頭から押さえつけるより、自分から勉強するように導かないと机に向かわせる前に疲れるだけだぞ。まったく、朝から俺や怜生を巻き込むな」
「はい。ごめんなさい」
理音は表情を変える事なく、今回の夕季の深秋に対するやり方は間違いだと言うと、夕季は反省しているようで小さな声で頷く。

「まぁ、ユキなら、同じ間違いはしないだろうが、みあ、アキもユキもお前を心配してるんだ。話くらい聞いてやれ」

「う、うん」

理音は深秋にも注意すると深秋は夕季が理音に謝る姿に自分が悪い事をしたと自覚したようで頷く。

「なら、良い。お前ら、昨日、清瀬から『ラ・ペディス』のケーキを貰ったんだが、食うか？」

「うん。ご馳走になるよ」

「「……」」

理音は話もまとまったため、居間に移動すると言うと明久は頷くが夕季と深秋の反応は薄く、

「そうか。インスタントしかないが、紅茶かコーヒーくらいは淹れるから、アキ、手伝え」

「うん。怜生くんも行こう」

「はい」

理音は夕季と深秋の様子を見て、明久と怜生と一緒に居間に移動し、

「……ユキ姉、ごめんなさい」

「みあちゃん、良いんです。私も少し言い過ぎました。はい。これ

で仲直りです」

「うん♪」

2人とも理音と明久の気づかいに気づいたようで2人は改めて、お互いに謝ると、

「りおくん、紅茶なら、ボクが淹れるよ。飛びっきりの美味しいの♪」

「みあちゃん、少し落ち着いてください」

2人で理音達の後を追いかける。

第２６問（前書き）

作者の作品『サドで邪悪な召喚獣』より、『前田理音』と『僕と歪んだ愛情表現？』の『吉井深秋』の登場です。

今回は特別問題と言うよりはｉｆになります。

理音が旅立とうとした日に、深秋、明久の２人は？

それではｉｆ～ボクと幼い日の約束～スタートです。

第２６問

「いやだ。行っちゃやだよ」

「……みあ、ダメだよ。リオが決めた事なんだから、それにちゃんとリオを見送るって約束したよね」

『吉井　明久』は幼なじみの『前田　理音』が外国に旅立つ日に泣きじゃくり、理音から手を離そうとしない妹の『吉井　深秋』を諭すように言うが、

「いやだ。やっぱり、やなの。アキ兄だって、りおくんがいなくなるのはいやでしょ？」

「まぁ、そうなんだけどさ」

「……」

深秋は泣きやむ事はなく、明久は困ったように笑うが、理音には表情はない。

「……なぁ。みあ、放してくれないか？」

「いや、放さない」

理音は表情を変える事なく深秋の頭を撫でて言うが、深秋の答えが変わる事はなく、

「困ったね」

「……そうだな。流石に次の電車に遅れるといろいろ厄介なんだが」
明久は深秋の様子に本当に困ったように笑い、理音も飛行機の時間もあるため、ため息を吐くと、
「みあ、約束するから放してくれ。毎年、とうさんの墓参りには帰ってくるし、この間、お前が言った通り手紙もちゃんと……！？」
理音は深秋に約束させられた事を守ると言うと途中で理音の唇に何かが触れ、理音の目には今まで理音の手を離さずに泣きじゃくっていた深秋の顔が映る。
「み、みあ、お前！？」
「……約束にもう1つ追加して、りおくんがおじさんに誇れるようになったら、ボクを迎えにきて」
理音は深秋の突然の行動に今まで無表情だった顔には驚きの色が見えるが、深秋は目に涙を溜めて理音に向かい彼女の精一杯の告白をすると、
「……あのなぁ。みあ」
「りおくんはボクじゃ、いや？」
「……いや。そうじゃなくてな。そう言うのは」
理音は深秋の顔を真っ直ぐに見れないようで顔を伏せて、明久に助けを求めると、

「リオになら、僕はみあを任せても良いと思うけど」

「……お前、状況を考えろ」

明久は理音に深秋を嫁に出しても良いと言い、理音は明久の返事にため息を吐くが、

「アキ兄からの許可も貰ったし、りおくん、約束だよ♪」

「ちょっと待て。抱きつくな!?　危ないだろ!?」

深秋は勢いよく理音に抱きつき、理音は深秋の勢いに巻き込まれて腰を落とすが深秋をしっかりと受け止めており、

「……約束、忘れないでね」

「……あぁ」

深秋は上目使いで理音の顔を覗き込んで言うと理音は恥ずかしいようで深秋の顔を直視する事なく頷く。

「……絶対だよ」

「あぁ。約束する」

深秋はもう1度、理音に確認するように言うと、理音は恥ずかしそうに目を逸らしているが、しっかりと返事をする。その声は1人の男としての決意を込めた声である

第２６問（後書き）

どうも、作者です。

楽しんでいただけたでしょうか？

先日、活動報告にも書かせていただいたのを少し直しました。

深秋でｉｆを書くとしたら？と考えると他の小説家さんの作品では思いつきませんでした。

深秋と理音が繋がることで２人はどう変わって行くのでしょうか？

そのうち書きたいと思いますね。

サドのｉｆとは違うオリキャラを借りて。（苦笑）

第２７問（前書き）

今回は秋雨さんの『バカとテストと召喚獣　試験召喚のすすめ』より、『久遠光一』、『大神白夜』兄弟と『僕と歪んだ愛情表現？』より『吉井深秋』のコラボです。

ファンの多い作品ですから怒られない事を祈りつつ出題です。

第27問

「ねえねえ。くおんくんのお兄ちゃんが3年生の主席の大神先輩ってホント？」

放課後に『吉井深秋』は双子の兄の『吉井明久』の親友であり、文月学園1の過激派とまで言われて学園の生徒から敵意の視線を受ける事の多いクラスメートの『久遠光一』に彼の実の兄であるが両親の離婚のために名字が異なる『大神白夜』の事を聞く。

「……だとしたらなんだ？」

「こ、光一、抑えるのじゃ。みあはただ白夜殿の事を聞いているだけであろう！？」

光一は白夜の名前に不機嫌そうに深秋を睨みつけると光一の幼なじみである『木下秀吉』が光一に落ち着くように言うと、

「……だとしたら、何だって言うんだよ」

「くおんくんのお兄ちゃんって噂がホントなら、紹介して貰おうと思ったんだよ♪」

光一は不機嫌そうな表情をしたまま、深秋に聞き返すが深秋は光一の様子など気にする事なく光一に白夜を紹介して欲しいと言いだす。

「……みあ、言っておく、兄貴には関わるな」

「何で？」

光一は深秋に白夜には関わるなと言うが深秋は首を傾げると、

「み、みあは何故、白夜殿を紹介して貰いたいのじゃ？」

「え？　だって、ゆうじくんと違って、今も優秀なんでしょ？　それなら、フランス語とかも話せないかな？　と思って、留学をする時に役に立つ事はしておきたいでしょ」

「……止めておけ。バカにされて追い返されるのが関の山だぞ」

秀吉は深秋が白夜に会いたい理由を聞くと深秋は自分の夢のためだと答え、光一は白夜が深秋に協力してくれるわけはないと斬り捨てるが、

「そっか。紹介してくれないなら、直接、行ってくるね♪」

「おい。みあ！？　……ったく、知らねえぞ。秀吉、いつまでも、みあが留学の話をするたびに落ち込むなよ」

「う、うむ」

深秋は光一の注意など聞く気もないようで教室を出て行き、光一は深秋を引き留めようとするが深秋が捕まるわけはなくため息を吐くと深秋に想いを寄せているが何も言いだせずにいる秀吉の肩を叩くと秀吉は肩を落としながら返事をし、

「……何もなければ良いけどな」

「光一、みあはどこに行ったの？」

「みあちゃんに何かあったんですか？」
光一は深秋は心配だが白夜には関わり合いたくないようで頭をかくと明久と『姫路瑞希』が光一に深秋の事を聞く。
「あぁ……みあが兄貴のところに行くと言い始めてな。止めたんだけど止まらなかった」
「そ、そうなんですか」
「光一、何か、ごめん」
光一は眉間にしわを寄せながら簡単に説明をすると明久と瑞希は苦笑いを浮かべると、
「まぁ、みあなら、きっと大丈夫だよ。光一のお兄さんでもみあには関係ないと思うよ」
「……そう思えるところも確かにあるのが不思議だ」
「そうですね。みあちゃんなら、大丈夫です」
明久は苦笑いを浮かべたまま深秋なら何となくどうにかすると言いその場は何となく納得できてしまうため、微妙な空気になる。
「お邪魔します♪」
「みあちゃん？　どうかしたんですか？」

深秋は明久や光一の心配などよそに物怖じする事なく、3年Aクラスの教室に入ると『小暮葵』が深秋を見つけて何かあったのかと駆け寄ってくると、

「あおい先輩♪　……やっぱり、スタイル良いですね」

「あ、ありがとうございます。それで、どうかしましたか？」

深秋は葵に抱きつき、彼女の身体を堪能し始めると葵は深秋の行動になれているのか苦笑いを浮かべながら深秋が教室に訪れた理由を聞く。

「えーとですね。くおんくんのお兄ちゃんの大神先輩いますか？」

「久遠だと？」

「おい。ここでその名前を出すなんてどう言うつもりだ？」

深秋は葵に抱きついたまま、白夜がいるかと聞くと『夏川俊平』と『常村勇作』は光一の名前に嫌悪感を示すが、

「あ、変態コンビ」

「「誰が変態コンビだ！？」」

深秋は2人を見て『変態コンビ』と言うと2人は声をあげる。

「親指先輩も大神先輩の居場所わかりませんか？」

「みあちゃん、いきなりそれは、それに頼みごとをしているわけで

すし、私の後ろに隠れないでください」

「そうだ！！　それが人に物を尋ねる態度か！！」

「お前、先輩を舐めてんじゃねぇよ！！」

深秋は変態コンビの顔を直視したくないようで葵の後ろに隠れながら変態コンビの片割れにも白夜の居場所を聞くがその態度はやはり失礼であり葵は苦笑いを浮かべ、変態コンビは声を張り上げて言うが、

「あおい先輩、仕方ないんですよ。あの2人は何と言うか生理的に無理ですし、顔も直視するには見るに堪えないから、何より、親指先輩はあのコスプレを舐めたような事をした事がありますから、イカリデボクノリセイガオサエラレナクナリソウデスカラ、コンナキモチワルイモノヲヨニダスナンテボクハユルセナクテネットデセカイジュウニマキチラシテハンセイサセテヤリタクナリマス」

「みあちゃん、抑えてください。それは危ないですから」

『確かに、やっといてなんだけど、見るにたえなかったよな』

『うん。みあちゃんの言う通り、あの顔は生理的に無理よ』

『おい。夏川、常村、お前、みあちゃんに謝れよ。汚いものを見せてすいませんって』

深秋は2人をバカにした後に怒りが抑えきれなくなりそうであり人外化が始まりだすと葵を始めとした3年Aクラスの生徒達は深秋の言葉を全面的に支持するため、変態コンビの2人は耐えられなかっ

たようで泣きながら教室を出て行き、

「それで、大神先輩はどこにいますか？」

「代表でしたら、今の時間はトレーニングルームにいると思いますよ」

「そうですか？　あおい先輩、ありがとうございます♪　先輩方、失礼しました♪」

深秋は変態コンビが視界から消えた事で理性を保つと葵に改めて白夜の居場所を聞くと葵は苦笑いを浮かべたまま白夜はトレーニングルームにいると深秋に教え、深秋は葵と教室に残っていた3年生に頭を下げて教室を出て行く。

「大神、いつもの事だがせいがでるな」

「……神に選ばれた者として当然の事です」

「そうか。俺は戻るからな。終わったら、鍵を返しにくるんだぞ」

「はい」

白夜はトレーニングルームで準備運動をしていると『西村宗一』教諭が白夜に声をかけるが白夜は当たり前の事しかしていないとトレーニングを続けていると西村教諭は白夜にトレーニングルームの戸締りを任せて出て行こうとすると、

「失礼します♪　あ。テツセンセー」

「……吉井妹、その呼び方は止めるようにと何度も言っているだろう」

ちょうど、ドアを開けた深秋と鉢合わせになり、西村教諭は深秋の言葉にため息を吐くが、

「やっと、見つけた。くおんくんのお兄ちゃんですね♪」

「……」

深秋は西村教諭の事など気にする事なく、白夜に声をかける。

「吉井妹、大神になんのようだ？　大神はトレーニング中だ。危ないから近づくな」

「そうなんですか？」

西村教諭はダンベルなどの機材を使っているため、深秋に当たる事もあるからと言い、深秋の首をつかんで引き離すと深秋は首を傾げると、

「……何だ？　愚弟への文句なら直接言え、私には関係ない」

「くおんくんへのお仕置きなら、ゆうちゃんとあいちゃんに任せるんで」

「……そうか」

白夜は光一と敵対している人間からの苦情だと思ったようであり、深秋を追い払うように言うが深秋は光一の話ではないと言うと白夜

は頷くだけは頷くが深秋に興味など無さそうでトレーニングを続けており、

「吉井妹、私は会議があるから、大神の邪魔をするんじゃないぞ」

「らじゃーです。テツセンセー」

西村教諭は深秋に白夜の邪魔をするなと言ってトレーニングルームを出て行く。

「大神白夜先輩だから、しろ先輩で良いですか？　あ、名乗り遅れましたけど2年Fクラスの吉井深秋です。みあって呼んでください♪」

「おかしな呼び方をするな……吉井深秋？　吉井？　……吉井明久の妹か？」

「はい。双子のお兄ちゃんはくおんくんの相棒をしています♪」

「まあいい。そんな礼儀も知らぬような奴相手に私は割くような時間は持ち合わせてなどいない」

深秋は白夜に自分の名前を名乗ると白夜は深秋の名前に何か感じたようで明久の妹かと確認すると深秋は笑顔で返事をするが白夜は深秋の相手をする気はないと言うとトレーニングを続けて行くと、

「……大神先輩、不快な思いをさせてしまい申し訳ありません」

深秋は白夜がトレーニングを続けるなか、何度も話しかけるが白夜は反応する事もないため、深秋は白夜に頭を下げる。

「……できるなら、なぜ、最初から行わない。敬語とは目上の人間に礼を尽くすと言う当然の行為だ」

「すいません」

「それで、何の用だ？　先ほども言ったはずだが愚弟への文句なら本人に言え」

白夜は深秋が態度を改めた事に一先ず、話だけでも聞いてやる気になったようでトレーニングを中断して深秋に声をかけると深秋はもう1度、白夜に頭を下げると白夜は深秋が自分のところにきたのは光一の話だと思っているようで眉間にしわを寄せるが、

「久遠くんの話ではありません。大神先輩はフランス語を話せませんか？　私は被服系の専門学校を進路に希望しているのですがその学校では成績次第でフランスへの留学できるんです」

「フランス語？　私に教えろとでも言いたいのか？　……くだらん」

深秋は光一の話ではなく、自分の進学に留学を視野に入れている事を話すと白夜は深秋が自分を訪ねてきた理由を理解したようであるが深秋に付き合う気はないようであり、深秋を突き放すように言う。

「お願いできませんか？」

「なぜ、私がそんな事をしなければいけない」

「大神先輩しか頼れる人がいないんです。お願いします」

しかし、深秋は諦める事はなく、白夜に何度も頭を下げると、

「……しつこい。だいたい、何で、私だ。私のところにくれば光一に睨まれるぞ」

「そんな事はないです」

白夜は自分に頼むのは深秋の人間関係にひびが入ると言うが深秋は白夜の言葉を直ぐに否定するが、

「……戯言を言うな」

「戯言ではないです。大神先輩は久遠くんを愚かだとは言いますが弟と呼びます。久遠くんも同じです。本当に憎んでいるならお互いを兄や弟となどとは言いません。大神先輩は怒るかも知れませんが私には2人が不器用だからすれ違っているように思えます」

白夜は深秋の言葉を戯言だと鼻で笑うが深秋は真剣な表情で白夜も光一もお互いに憎み合ってなどいないと言うと、

「……お前もそのクチか？　私に媚びにきたように見せて、善人ぶって私と光一の仲を取り持とうとするわけか？　くだらん」

「くだらなくないです」

白夜は深秋の言葉を一蹴すると深秋も他のくだらない偽善者と同じと判断してトレーニングを再開させようとするが深秋にも譲れないものがあるため白夜から視線を逸らす事無く白夜の腕をつかむ。

「……邪魔をするな」

「邪魔をする気はありません。でも、私にだって譲れないものがあります」

「何だ？　あの吉井明久の妹らしく、兄弟だから仲が良いに違いないとでも言いたいのか？　私はあんな愚弟となど似ていないし、愚弟となれあうつもりもない！！」

「別にボクは2人になれあえなんて言ってない！！　でも、これだけは言える。2人は似てる。まっすぐに自分の目的のために進もうとする姿勢が久遠くんは夢に大神先輩はなりたい自分に向かってちゃんと進んでる。それは久遠くんが大神先輩の背中を見てた証拠です！！」

「ふざけた事を言うな！！」

「手を出すなら、出せば良い。でも、ボクは自分が納得できない力には屈しない。それがアキ兄や久遠くん、みんなから貰ったボクのプライドだから」

「脅しだとでも思っているのか？　お前だって、私の話は聞いてるはずだ」

「聞いてます。でも、大神先輩はそんな感情に任せた事はしない。それをしたら自分がボクに負けたと認める事だから、大神先輩はぶつかってくる人間には同じ土俵で相手を倒す事が大神先輩のプライドだから、ボクは大神先輩のプライドを信じてる」

白夜は深秋が鬱陶しいようで手を払おうとするが深秋の瞳には白夜の認める『明久と同じ強さ』が映っており、白夜は深秋を威圧する

ように言うが深秋の瞳の中の光はより鮮やかに力強い光を放ちはじめ、白夜は深秋の様子に息を飲んでしまう。

「大神先輩は不器用だから、久遠くんに何も言わずに兄としての背中を見せていた久遠くんに誇れる兄であろうとしていた。でも、周りはそうは見てくれなかった。そして、大神先輩に敵わないからって周りは久遠くんに理不尽な敵意を向けた。大神先輩は久遠くんは自分の弟だからそんな理不尽なものには負けない、乗り越える力も心もあると思ったから手を差し伸べなかった。久遠くんも心のどこかで大神先輩の気持ちがわかってたから強くなった。ボクはそう思えてならない。そうじゃないとヒデくんやゆうちゃんがいたってきっと心が壊れてしまう。大神先輩と久遠くんは絶対に心で繋がってる。なれあいじゃない。なれあいであってはいけない。それが大神先輩と久遠くんの兄弟の絆だとボクは思う」

「……そんな事実はない。いい加減な事を言うな」

「わかりました。失礼な事を言ってしまい申し訳ありませんでした。私はこれで失礼します」

深秋は白夜と光一には周りが口を出してはいけない兄弟の絆があると言うと白夜は呆れたように首を横に振り、深秋は白夜の様子に何かを感じたようで頭を下げるとトレーニングルームを出て行こうとするが、

「待て。お前は私に用事があったのではないのか？」

「そうですけど、あんな失礼な事を言いましたから」

「それが理解できている分、お前はウチのクラスの奴らよりは伸び

しろもあるだろう。私はお前の勉強になど付き合う暇はないが以前、使った資料をくれてやろう。明日の朝にもでも取りにこい。私が成長する糧になるくらいに成長して見せろ」

白夜は深秋にも何か感じる事があったようで深秋の成長を手伝う気になったようであり、深秋に自分がフランス語を覚えて時に使った資料を明日取りに来るように言うと、

「ありがとうございます」

「……用が済んだなら出て行け」

深秋は深々と頭を下げて白夜に礼を言うが白夜はすでに興味がなくなったようで深秋を追い払うように言うとトレーニングを再開させる。

「おはようございます。大神先輩をお呼びいただきたいのですが」

「また、きたのか？　吉井深秋」

「お前は3年をなんだと思ってるんだよ？」

翌朝、深秋は白夜との約束を守り、カバンを手に3年Aクラス教室に顔を出すと深秋の顔を見た変態コンビが深秋に因縁をつけ始めるが、

「……私の客になんのようだ？」

「お、大神？　何でお前が？」

「まさか、吉井妹と」
白夜は深秋が顔をのぞかせている事に気づくと変態コンビは深秋と白夜の関係におかしな事を考え始め、
「……くだらない事を言っているヒマがあるなら少しでも努力をしたらどうだ？　そんな事だから光一や吉井明久に後れを取るのだ」
「おはようございます。大神先輩」
「あぁ。おはよう」
白夜は変態コンビの言葉に嫌悪感を示すと深秋が白夜の前に移動して深々と頭を下げると白夜は挨拶を返すと、
「これが約束のものだ。使って見て不要だと思ったら捨てろ」
「捨ててしまっても良いんですか？」
「私には不要だからだ。もうそこから学ぶものは何もない」
深秋にフランス語の資料を渡すと直ぐに自分の席に戻ろうとする。
「待ってください。大神先輩、これ、資料のお礼です。お昼にでも食べてください」
「……私はなれあいが嫌いだと言ったはずだが」
深秋は持っていたカバンから弁当箱を取り出すと白夜は眉間にしわを寄せながらいらないと言おうとするが、

「ダメです。ただでもらうわけにはいきませんからお返しをするのは礼儀です。違いますか？」

「……そうか」

「お弁当箱は帰りに取りにきます」

深秋は礼儀だと言うと白夜は仕方ないと言いたげに頷き、深秋は白夜の様子に笑顔を見せた後、白夜に頭を下げて自分の教室に戻って行き、

「代表、みあちゃんから、お弁当を貰ったのですか？」

「あぁ、礼だそうだが……しかし、これは食えるのか？　料理が出来そうには見えないが」

「みあちゃんはお料理は得意です。２年生の家庭科はトップですし、実技の方も優秀な成績を修めてます。茶道部に使うお茶菓子も良く作ってきてくれますし、評判も良いです。少し……かなり、感情で走ってしまう事もありますけど、優しくて友達思いの良い子ですよ」

「……そうなのか？　意外だな」

白夜は深秋から渡された弁当箱を手に席に戻ると葵が白夜に声をかけ、白夜は葵から聞かされる深秋の話を興味無さそうに聞き流す。

「おはよーございます♪」

「みあ、どこに行ってたの？」

「うん。ちょっとね」

深秋が教室に戻ると明久が声をかけてくるが深秋は軽く返事を返すと直ぐに自分の席に座り、白夜から貰った資料を開くとその資料には白夜の字で細かく注意点や重要な事が記載されており、

「す、凄い。ボクが持ってるどの本よりわかりやすい」

「みあ、何してるんだ？」

深秋は白夜の資料に驚きの声をあげると『坂本雄二』が資料を覗き込むが、

「……ゆうじくんももう少し頑張れば良かったのにね。昔は同じ評価を受けてたわけだし」

「あ？　いきなり、何を言ってるんだ？」

深秋は昔は白夜と同じく神童と評価を受けていた雄二を見てため息を吐くが雄二は意味がわからずに首を傾げる。

第２８問（前書き）

久しぶりの投稿です。

今回はＧＡＵさんの『バカと雲雀と召喚獣』より、『クリスティーナ＝ウェストロード』とノラ猫『黒須伐』のお決まりのコラボです。

時間軸は以前書かせていただいた第６問の後ですね。伐とクリスは半同棲状態もしくは同棲中でしょうか？

それでは楽しんでいただけると幸いです。

第２８問

「……ったく、どうして、こいつは人のベッドの中に入り込んでくるんだよ？」

『黒須伐』は目を覚ますと隣で小さな寝息を立てている少女『クリスティーナ＝ウェストロード』に気づき、大きなため息を吐く。

「……わざわざ、部屋を用意した意味がねえじゃねえかよ。無駄な出費だ。生活費もまともに入れねえくせに」

伐は自分はバイトで明け方に帰ってくる事も多いため、先に眠っている彼女を起こさないために彼女にも寝室を用意したのだが伐が眠りについてしばらくするとクリスは毎日のように伐のベッドに忍び込んできており、伐は面倒そうに頭をかいた後、枕元に置いてあるタバコの箱からタバコを１本取り出して口にくわえると愛用しているオイルライターでタバコに火を点け、

「……腹減ったな。一先ずは飯か？」

腹の虫が悲鳴を上げているため、食事をしに行こうと思ったようで小さな寝息を立てているクリスを起こさないようにベッドを抜け出してキッチンに移動し、

「あぁ。そう言えば、食いものあったか？　……ここ数カ月、米を買った記憶がねえな」

欠伸をしながら備蓄している食料品の確認をしようとした時、キッチンのテーブルに不格好な握り飯が置いてある事に気づく。

「……あいつは何がしたいんだ？　無駄な事をしやがって……ったく、めんどくせぇ」

伐はこの握り飯はクリスが自分のために作った事は直ぐに理解したが彼は両親に捨てられた日から他人の作った料理は身体が拒絶するようになっており、食べられるわけのもないため、不機嫌そうに舌打ちをするがそれでもクリスの泣き顔が目に浮かんでしまったようで乱暴に頭をかくとくわえていたタバコを置いてある灰皿に押し当て火を消すと握り飯ののせた皿にかけてあるラップを取り、

「……あいつ、センスがねえな。まぁ、元々は料理なんか誰かがやってくれるような家柄だしな」

クリスの作った握り飯と隣につけあわせてある繋がったままの漬物をまじまじと見てため息を吐くとこれから自分に起こる事がらを理解しているため、覚悟を決めると握り飯を頬張り無理やり胃の中に詰め込むと同時に彼の胃は侵入物を拒絶するように身体の外に押し戻そうとするが、

「……ったく、らしくねえ」

伐は意地でも吐きだすつもりはないようで顔を青くしながらも精神力で何とか自分の胃に言う事を聞かせてクリスの作った朝食を飲み込み。

「……とりあえず、こんなものでも礼の1つに朝飯でも作っといてやるか」

気だるそうにため息を吐きながらキッチンに立ち、残っている材料

で簡単ではあるがクリスの朝食を作り始めると、

「伐♪」

「あ？　ひっつくな。暑苦しい」

クリスは伐とクリスの握り飯との死闘を影から見ていたようで嬉しそうな表情で伐に抱きつこうとするが伐は表情を変える事なく彼女の頭に手を出し、彼女の行動を制止し、

「……余計な事をするな。食費の無駄になる」

「う。うん。ゴメン」

クリスは伐から優しい言葉を期待していたようではあるが伐がそんな言葉をかけてくれるわけはなく、クリスは小さく肩を落としているが、

「……俺は買い物に行くからヒマなら付いてこい」

「う。うん」

伐はテーブルの上にクリスの朝食を置くと乱暴ではあるが彼なりのクリスへの礼をしたいようであり、クリスは伐の言葉に嬉しそうに返事をする。

第２９問（前書き）

今回は第２８問の後日談？と言ったところでしょうか？

出演はＧＡＵさんのバカと雲雀と召喚獣より『クリスティーナ＝ウェストロード』、『支倉ひばり』、作者のサドで邪悪な召喚獣より、『前田理音』、『弓永深月』。

今回のひばり、理音、深月の人間関係は作者の『サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～サドとちっちゃな幼なじみ～』を適用しています。

第２９問

「それじゃあ、黒須くん、ちゃんと食べてくれたんだ」

「そのまま、お姉さんをデザートにしてくれたんだよん」

「な、何を言っての！？」

『クリスティーナ＝ウェストロード』は先日、半同棲中の『黒須伐』が自分の手料理を食べてくれた事をクラスメートであり、現在、クリスへの料理の指導をしてくれている『支倉ひばり』に報告するが途中で照れ隠しなのかひばりをからかい始め、ひばりはクリスの言葉に顔を真っ赤にするとどこからか愛用の『れおしょ、とーるはんまー』と書かれたピコピコハンマーを取り出してクリスに振り下ろそうとするが

「……ひばり、クリス、暴れるな。今は一応は調合中だ」

「ごめんねい。りんりん」

「う。ごめん。理音くん」

この部屋の主であり、ひばりの幼なじみ兼彼氏でもある『前田理音』が２人のじゃれ合いを止めるとクリスは軽い調子でひばりは申し訳無さそうにと対照的ではあるが理音に謝る。

「ん。反省するなら問題ない。反省しないなら今日はそれなりに危険な薬品も混じっているからな。ああなるところだった」

「ちょ、ちょっと、深月ちゃん！？　り、理音くん、何をしてるの！？」

「あれえ。つっきー、緊縛プレイ？　りんりん、なんなら、お姉さんも縛ってみるかなん？」

理音は2人の様子に表情を変える事なく、止めなければああなっていたと研究室の隅を指差すと『弓永深月』は縄で縛られ、床に転がされており、深月の様子にひばりは慌てて深月に駆け寄るがクリスは楽しそうに理音をからかおうとするが、

「悪いな。緊縛プレイは趣味じゃないんだ」

「ほう。それなら、いつもはどんなプレイでひばりんを悦ばせているのかなん？　お姉さんに教えてみない？　何なら、お姉さんが毎日のようにばつにゃあと繰り広げているプレイを」

「ん？　そうは言っても最近はお前と黒須はないだろ？」

「うん。ボクもそう思う」

理音はクリスの言葉を否定するとクリスはそれでも理音をからかおうとするが理音はクリスと伐の夜の生活が減ってきていると言うとひばりに縄をほどいて貰った深月も理音と同意見のようで頷き、

「理音くんも深月ちゃんも何を言ってるの！？」

「そ、そうだよん。お姉さんとばつにゃあは毎晩、毎晩、お互いを求め合っているのだよん」

ひばりは顔を真っ赤にしながらとーるはんまーで理音を何度も叩きつけ、研究室には『ポコ』と言う緩い音が何発も聞こえるなかクリスは伐との夜の生活は今も盛んだと言う。

「……いや。クリスが黒須の家に転がり込むようになってからは黒須もお前も盛りの付いた猫のような匂いがしない」

「うん。ボクも理音に賛成。そうだね……最後は3日前の朝、登校する前って感じ」

「……」

理音と深月は否定するクリスの近くまで寄ると理音と深月はクリスの匂いで判断したと言い、深月に至ってはさらにリアルな数字まで出しており、流石のクリスも顔を引きつらせると、

「まぁ、クリスが一緒にいるようになって黒須のタバコも減っているし、良い傾向なんじゃないのか？　医療従事者としては2人の心の傷を癒す事にはなっているように見える」

「そうだね。最近は時折、優しい笑みを浮かべるようになったし……黒須くんとは誰をかけるべきかな？」

「そうかな？」

「クリス、素が出てるぞ」

「な、何を言ってるのかなん。りんりんは」

理音と深月はクリスが伐のキズを癒していると言うとクリスは2人

の言葉に嬉しそうに表情を緩ませ、理音はそんな彼女の姿を見ていたずらな笑みを浮かべ、クリスは慌てて何もないと言い、

「それより、ひばりん、次は何を作るべきかなん？」

「えーと、やっぱり、おみそ汁とかかな？　毎日でも食べれるものだし、やっぱり、基本だし。うん。そうしようよ。この間はおにぎりと……理音くんが漬けてるぬか漬けだし」

「理音、ぬか床持ってるの？　ボクも始めてみたいんだけどさ。良いぬか床になるまで時間がかかるって言うでしょ。知りあいで持ってる人いないしさ」

「あぁ。怜生とよく遊んでくれる近所のばあさんに半年くらい前に分けて貰ってな。それから、毎日、育てているぞ。欲しいなら帰りにでも取りに来るか？」

「うん。遠慮なく貰う」

クリスは話を変えようとしたようでひばりに次の料理をどうしたら良いかと聞くとひばりは最初のメニューにクリスのおにぎりの隣に理音のぬか漬けが並んだ意味がわからずに大きく肩を落とすと理音と深月はぬか漬けについて話し始め、

「おみそ汁か……それより、もっとインパクトがあるものが良いかなん」

「インパクト？　クリス、黒須くんが好きな食べ物ってないの？」

「ばつにゃあが好きな料理？　好きなもの？　うーん。女の子？

……女体盛り？　ひばりん、お姉さんの料理の練習に手伝ってくれるんだよねい？　盛りつけはセンスだよねい。どんな風に盛りつけようかなん♪」

「な、何をいってるの！？」

「大丈夫。大丈夫。ひばりんの女体盛りはちゃんとりんりんにひばりんごと食べて貰うから、お姉さんもそこら辺はしっかりと理解してるから安心して欲しいよん」

クリスは理音と深月のペアには敵わないと思ったようでからかう対象をひばりに移し、ひばりはクリスの言葉に顔を真っ赤にするが、

「りんりん。ひばりんの女体盛り、しっかりと食べてくれるよねい？　もちろん、『お皿』も残さずにねい」

「ん。女体盛りは生臭くなりそうなんだが、もちろん、残さずに食うぞ」

「結局、生臭くなるのは変わらないから問題ないんじゃないかな？」

「そうそう」

「さ、3人とも何を言ってるの！？　そ、そんな事はしません！！」

ひばりいじりが止まる事はない。

第３０問（前書き）

どうも、作者です。久しぶりのコラボです。

今回はＧＡＵさんの『バカと雲雀と召喚獣』からおなじみになった『支倉ひばり』と『クリスティーナ＝ウェストロード』と作者の作品からは『前田理音』と『黒須伐』です。設定としては理音とひばりはサド邪ｉｆの設定を使用。伐とクリスの関係は……まあ、この２人は今までのコラボの関係を引っ張ってます。

今回は少し早いけどクリスマス企画？

数話かかる予定なので続きも楽しんでいただければ幸いです。

第３０問

「うん。仕事じゃ仕方ないよ。大丈夫だよ。ちゃんと帰るから」

『支倉ひばり』はクリスマスの夜にいつも忙しい父親と待ち合わせをしていたのだが小説家をしている彼女の父親は急な打ち合わせが入ったようでひばりは父親に心配をかけないように返事をして電話を切る。

（1人か？　この後に1人分のご飯を作るのか。理音くんはお仕事で日本にいないし、アキくん達は霧島さんの家でパーティー、急に行くのも悪いし）

ひばりは父親との約束もあるために友人達がやっているクリスマスパーティーに参加しようとも思ったようだが断った事もあるためどこかに遠慮があるようであり、小さくため息を吐きながら夜の街を家に向かって歩き出そうとした時、

「ご、ごめんなさい！？」

「あ？　幼女か」

「あ、あたし、そんなに……ちっちゃくないです」

1人の少年にぶつかり、ひばりは慌てて頭を下げると彼女がぶつかった少年『黒須伐』はひばりを見て彼女の小さな容姿をバカにするとひばりは自分は小さくないと叫ぼうとするが彼女は伐の事が苦手なようで声は小さくなるが、

「で、幼女、こんなところで何をしてるんだ？」

「ちょ、ちょっと、黒須くん！？　頭の上に手を置かないで！？」

伐はひばりの頭がちょうど手が起きやすい位置にあるようであり、ひばりは伐のいきなりの行動に声をあげる。

「ガキがこんな場所で遊んでいるヒマがあるなら、さっさと帰りな。それとも、ここで彼氏とデートか？」

「違うよ。お父さんと待ち合わせだったの。それに理音くんはお仕事で外国に行ってるし」

「あぁ。そう言えばしばらく、見てねえな」

伐は懐からタバコを取り出して口にくわえてひばりが夜の街をうろついている理由を聞くとひばりは今の状況を話し、伐はひばりの彼氏である『前田理音』が今は日本にいない事に気づき、

「それなら、うろついてないでさっさと帰れ。１人で寂しいなら、霧島夫婦の家にでも行けば良いだろ」

「で、でも、あたし、１度、断ってるし……あれ？　黒須くんは行かないの？　クリスは行くって言ってなかった？　それより、黒須くんはせっかくのクリスマスなのにどうして１人でこんなところにいるの！？」

「知るか。俺は遊んでいられるほどヒマじゃねぇんだよ」

伐はひばりがおかしな事に巻き込まれている姿も見ているためか、

彼女を追い払うように家に帰るように言うとひばりは伐と半同棲中である少女『クリスティーナ＝ウェストロード』と伐が一緒にいない事に驚きの声をあげるが伐の反応は薄く、

「それより、早く帰らないと寒さで縮むぞ」

「縮まないよ！？」

「そうか。1人で帰るなら、タクシーでも拾え、最近はいろいろと物騒だしな」

「タクシーなんてもったいないよ……そうする」

伐は表情を変える事なく、ひばりをからかった後にタクシーを使って帰るように言うがひばりは1度、ため息を吐くが夜の街からはおかしな喧騒が聞こえ、ひばりは小さく頷くがクリスマスのようなイベントがあり、忘年会シーズンでもあるこの時期にタクシーになど乗り慣れていないひばりにタクシーをつかまえるような事はできず、

「……わかっていたが、幼女、お前、鈍いな」

「う……」

伐は眉間にしわを寄せるとひばりはその小さな体をさらに小さく縮め、

「行くぞ」

「ちょ、ちょっと、黒須くん、どこに行くの？」

「道で捕まえるような事はできないだろ。だいたい、小さすぎて運転手に見えないだろうしな」

「あ、あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

伐は声をあげるひばりを引きずって歩きだす。

「ここって、ひょっとして、黒須くんの家？」

「あぁ。変に道で捕まえるより、場所を指定した方が捕まるだろ。タクシーを呼ぶから部屋に入ってろ。心配するな。お前に手を出すのは命が危ないからな」

しばらく、ひばりは伐に引きずられていると伐は家に向かっていたようであり、家代わりに使っているテナントの2階の部屋のドアを開けると伐は携帯電話を取り出し、

「う、うん。お邪魔します」

「お帰り。伐♪」

「むぎゅう」

ひばりが玄関を開けた瞬間、そのタイミングを狙っていたかのようにクリスがひばりを伐と勘違いしたようで思いっきり飛び付き、ひばりはクリスの勢いに潰され、

「……お前は何をしてるんだ？」

「へ？　ば、伐？　あれ？　……ひ、ひばり！？　ど、どうして」

伐は眉間にしわを寄せるとクリスは手のなかにいるのがひばりだと言う事に気づき、驚きの声をあげ、

「……ク、クリス、揺すらないで」

「ご、ごめん。ひばり」

目を回しているひばりの身体をクリスは大きく揺すり、ひばりの目は回って行く。

第３１問

「……３０分くらいかかるみたいだ。俺は事務所で仕事をしているから勝手にしてろ」

「う、うん。ありがとう。黒須くん、クリスも色々とゴメンね」

「ひばりん、謝らなくて良いよん。そうそう。それより、ばつにゃあ、仕事に行く前に」

ひばりは部屋の中のソファーに寝かせられると伐はタクシーが到着する時間を伝えるとひばりの前にコーヒーを置き、何か仕事をするつもりなのか部屋を出て行こうとするとクリスは申し訳なさそうにひばりに頭を下げた後、伐の名前を呼び、

「あ？　なんだ！？　ぐっ」

「ちょ、ちょっと、黒須くん！？」

伐はクリスの言葉に振り返るとクリスは伐の口元にケーキを運び、伐はそれを数度、咀嚼すると彼の身体は侵入物を拒絶し、伐は顔を真っ青にすると口を押さえて駆け出して行き、

「うーん。まだ、不意打ちだと無理みたいだねん？　せっかく、あーん？　ばつにゃあ、美味しい？　ってやってみたかったのに」

「ちょ、ちょっと、クリス！？　な、何をしてるの？」

「クリスマスだし、やっぱり、ケーキは重要かなん」

クリスは伐の様子に苦笑いを浮かべるとひばりはクリスの突然の行動に慌てるがクリスは形の崩れたケーキを見てクリスマスにはケーキが重要だと言い、

「だ、だからと言って、黒須くん、大丈夫なの？」

「……あぁ。クリス、お前は何をしやがる？」

「少しだけ、ひばりんには悪いけどばつにゃあに嫌がらせ。流石に不意打ちに苦手な甘いものは無理だったか……残念だよん」

ひばりは伐に駆け寄るがクリスは少しだけ不満げであり、

「……ちっ」

「ちょ、ちょっと、黒須くん！？」

「うるせえ、俺はやる事があんだよ」

伐は舌打ちをするとそれ以上何も言わずに部屋を出て行く。

「ク、クリス、良いの？」

「良いの。良いの。ひばりんが帰ったらたっぷりとサービスをするしねん。それより、ひばりんはこんな日にどうして1人なのかなん？　そう言えばりんりんは外国だっけ？」

「う、うん。ちょっと、どうしても外せないらしくて、理音くんはお医者さんなのに自分の身体の事は気にしないし、最近は召喚プロ

グラムのお仕事もしてるから身体を壊さないか心配なんだけど」

ひばりは自分が来たせいで2人がケンカをしてしまったと思ったようでクリスに伐を追いかけなくて良いのかと聞くがクリスは苦笑いを浮かべるとひばりが1人でいる理由を聞き、話は理音の事に変わるとひばりは理音の事が心配なようで大きくため息を吐くと、

「その時はひばりんがお疲れのりんりんをこのたわわに育った胸(かじつ)で癒してあげればいいんだよん♪」

「う、うにゃあああ!?」

クリスがニヤニヤと笑うとひばりの小さな身体には不釣り合いに育った胸に揉み始め、ひばりは驚きの声をあげて飛びのき、

「……ひばり、大きくなってるよね？　理音に揉まれてる？」

「揉まれてないよ!?」

クリスはひばりの胸の成長に一瞬、素に戻るがひばりはクリスの突然の行動に慌ててており、クリスの変化に気づく事はない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3119u/

繋ぐ絆と境界破壊

2011年12月16日00時52分発行